

### 3. シニア隊員に対する調査事項と調査結果

調査対象者: 中井一芳シニア隊員

#### (1) DOST-SEIはシニア隊員の業務環境整備をきちんとおこなったか。

- オフィスの提供、文房具や消耗品の提供、電話等通信手段確保等、他の職員と同様に使用することができた。
- カウンターパートというよりはプロジェクト運営のパートナーとして職員1名が常時運営に携わった。

#### (2) JOCVミニッツに示されたプロジェクト目標はパッケージ協力の目標の一環として適切であったか。

ミニッツに示された協力隊プロジェクト(チーム派遣)の目標は、RSTCの活動活性化であり、パッケージ協力の目標であるINSETシステム作りには側面から支援せざるを得なかった。

#### (3) DOST-SEIはJOCVのミニッツに示された役割を遂行したか。

- |                        |                                      |
|------------------------|--------------------------------------|
| • シニア隊員へのオフィス等の施設提供    | 遂行した                                 |
| • 理科教育に関する情報提供         | よく行われた                               |
| • シニア隊員の公務出張の旅費負担      | 申請時にはすべて支出された                        |
| • PNVSCAとの隊員活動に関する業務調整 | よく行われた                               |
| • シニア隊員と共に隊員活動のモニター    | 四半期報告書の作成や職員によるRSTC訪問、研修会見学などよく行われた。 |

#### (4) プロジェクト運営のためにどのような会議を持ったか。

(プロジェクト運営実績参照)

#### (5) DOST-SEIは隊員の活動や機材の管理について、各RSTCにどのような指導助言をおこなったか。

- 隊員活動について 隊員による活動報告会で活動を行ううえでの注意点(カウンターパートの利用方法等)をアドバイスした。
- RSTCにて行われた理数科研修会に出席して、活動内容や業務環境整備についてRSTC所長や隊員のカウンターパートにアドバイスした。
- 機材の管理について 理科機材についてはJIGAの供与機材の使用方法に関する合意書をシニア隊員と共に作成した。
- 車輻については、ピコール大学にて供与された車輻が私用に使われて隊員活動に支障がでたことがあったため、各RSTCに走行表を付けさせて提出させるようにした。

#### (6) シニア隊員は隊員の活動をどのようにモニターリングしたか。

- 週に一度各RSTCの隊員と電話連絡をしている。
- 毎月末に各RSTCの隊員から月例報告が提出される。
- 四半期ごとに四半期報告書が提出される。
- 2か月に一度程度各RSTCを訪れて、活動状況把握をおこなっている。

#### (7) プロジェクトあるいは隊員が抱えた主な問題は何か。また、問題を抱えた時にDOST-SEIがどのように対応したか。

- 無償資金協力によって建てられるはずであったRSTCの建物が建設されなかった。隊員は長いあいだ施設(特に実験室や工作室)がない状態で活動を続けざるを得なかった。ピコール大学とウエストピサヤ大学についてはDOST-SEIが資金を出して、RSTCの実験室を建設した。アテネオデダバオ大学はRSTC所長の尽力で附属小の校舎内に実験室を確保した。

- JICA 供与車輛が私用に使われ隊員活動に支障が出た。  
DOST-SEI が大学に警告と改善のレターを発送したり、職員が大学を訪問して指摘した。
- 適切なカウンターパートの不在または隊員との作業時間が確保できなかった。  
DOST-SEI が RSTC 所長会議にて現状を把握。大学宛に環境整備の依頼レターを発送した。  
DOST-SEI 職員がシニア隊員と共に RSTC を訪問して環境改善を促した。

(8) PNVSCA とはどのような業務調整をおこなったか。

隊員の派遣リクエストや新規赴任隊員の研修に関して、DOST-SEI が各種書類の準備等で PNVSCA と調整を行った。また、シニア隊員が DOST-SEI を通じて四半期ごとに PNVSCA に報告書を提出し、隊員の活動状況や業務環境等について報告した。

(9) 隊員が活動した3つのサイトはモデルサイトとして評価できるか。

1. 教育計画と実施の観点から

現状では、各 RSTC ともしっかりとした年間計画を立てられるまでの条件がそろっていない。唯一ピコール大学 RSTC が年間計画を立てて活動を実施しているが、計画どおりに実施されるとは限らない。ただし、協力隊が入る前の RSTC は組織さえほとんどわからないほど貧弱であったことを考えると大きな進歩といえる。

2. 教員の指導監督の観点から

(教員の指導監督は RSTC でなく DECS の役割である)

3. 施設設備の観点から

ピコール大学 RSTC は98年10月に新築の建物に移転し、各教科の実験室と事務室を備えた施設となった。ウエストビサヤ大学 RSTC にも95年に DOST-SEI の予算で実験室が供与された。また、アテネオデバオ大学 RSTC は98年11月に同附属小学校の敷地内に実験室を確保し、3RSTC ともやっと施設の面で充実したところである。機材については、どの RSTC にも基本的な理科機材と事務機器一式および車輛を JICA で供与したほか、DOST-SEI 等の援助で高額機材もはいつており、その意味ではモデルといえる。ただし、フィリピンの他の建物同様、電気や水の供給は安定していない。

(10) 隊員派遣はスムーズにおこなわれたか。隊員派遣に関しての問題点は何か。

- 一代目の隊員派遣は計画どおりに行われたが、二代目以降は適格者の不在や辞退者が連続したことによってスムーズな派遣ができなかった。前任者との間が1年近くもあいてしまう例や交替隊員が来ないために任期を延長して対応する例などが複数あり、隊員の派遣については今後の課題となるべき点が多い。
- 本年3月に来比した調査団は12名の隊員をバランス良く連続して派遣することは現状のシステムでは困難と判断して、第2期以降は各サイト3名合計9名程度の派遣とすることを提案したが、RSTC からは4名以上の要請が出ているため検討する必要がある。隊員の1年派遣制度が開始されたりと、事務局側でもスムーズな派遣を目標に改善を計っているようなので、それらの動向をみて対応したい。
- また、隊員の赴任先決定については、配属先からサイトによる片寄り(隊員の年齢や教員経験の有無)が指摘されているので、可能であれば赴任先決定の際に現場の意見を聴いていただきたい。

(11) プロジェクト運営について関係機関の協力は得られたか。

各機関ともプロジェクトの運営には協力的であったととらえている。隊員やプロジェクトが問題を抱えた時にも、DOST-SEI や RSTC が随時対応する体制にある。

(12) プロジェクト運営上の問題点はなにか。

現時点ではプロジェクト運営上の大きな問題点はない。

隊員の配属先である RSTC の職員が大学教員との兼任で多忙であるため、RSTC の年間計画がたてられないことや隊員が職員と一緒に作業する時間の確保が難しいこと、RSTC と DECS 等の他機関との連携が十分でないことなど、各種の条件整備が関係機関の今後の課題として残っている。

(13) パッケージ協力との関係上の問題点は何か。

日本側フィリピン側ともにパッケージ協力の中での協力隊の位置付けとその業務が明確でなかった(明確にできなかった)ことが上げられる。特に地方では、各機関の協力体制の整備も遅れているため、RSTC 配属の隊員 DECS の学校あるいは DECS 主催の研修にでかける際に、複雑な手続きを要したり、RSTC との間でどちらの研 支援を優先すべきなのかといった葛藤が見られた。

(14) パッケージ協力の一環として協力隊を投入したことをどのように評価しているか。

上述のような問題点があったものの、地方における条件整備も含めてパッケージ協力の中で、結果的に一定役割を果たしたのではないかとと思う。

しかし、隊員の年齢や経験等を考えると、行政のシステムづくり(条件整備)を支援するのは専門家によって行われるほうが望ましい。隊員はあくまでも実験観察方法の普及や理科実験器具の使用方の説明といった教科面の業務を中心に行うべきと考える。

(15) 隊員がパッケージ協力のうちの JOCV 以外の活動との関連で何か問題を抱えていたように思われたか。

特に問題ということはない。

(16) チーフアドバイザーとの連携はどうであったか。

月に1~2回の会合を持ち、協力隊プロジェクトの現状報告をしたり、パッケージ協力全体の進行状況等について確認したりした。隊員の会議がマニラで行われる際には、できるだけ隊員と直接意見交換をしていただいた。プロジェクト運営や隊員活動についての適切なアドバイスを随時していただき感謝している。

(17) パッケージとして活動する際、チーフアドバイザーの必要性はどうか。コーディネーターとしての役割(特にプロ技とのイブとして)は重要であったか。

パッケージ協力のような統合的な技術協力を行ううえでは、チーフアドバイザーのようなリーダー(まとめ役)は要である。ただし、コーディネーターとしての役割を重視して派遣されるのであれば、ひとつの省庁でなく JICA 事務所か NEDA のような位置がよいのではないかとと思う。

(18) プロ技協との連携はどうであったか。

- シニア隊員は月に1~2回 ISMED を訪問して、活動についての意見交換をおこなった。また、必要な情報を各サイトの隊員に伝えたり、隊員からの報告を専門家に伝えた。
- 隊員もマニラに来た際に、随時 ISMED を訪問して、主に担当教科の専門家に技術的な支援をしていた。隊員と専門家の関係はどの教科も非常によく、専門家の方々には隊員が地方研修を支援するうえで技術的に大きなバックアップをしていただいたと思う(地方で行う際の代替薬品や材料についての相談、専門的な内容についての相談など)。また、RSTC で理科隊員の研修会を行う際にも何名かの専門家が見学訪れて情報交換をした。

(19) 事務局との連絡調整はどうであったか。

プロジェクト自体に大きな問題点がなかったため、特別に事務局と連絡をとる必要は生じなかった。巡回指導というかたちで数回来比した調査団には、各サイトでの活動発表を通じて現状を理解していただいたことと思う。場の状況は定期的(四半期ごと)に報告書で報告しているが、それに対する返答がほとんどないので、事務局がどのように評価しているのかとか、今後の方向としてどのように考えているかを知ることができないのが残念である。

(20) 要請されている内容に対して、隊員の技術レベルをどう評価しているか。

個々の隊員によって技術的なレベルや語学力がちがうため一概には言えないが、隊員が教員研修の講師として教壇に立つのは困難である。また、研修の運営に係る部分での支援(研修プログラム作成や会場のアレンジ等)は隊員の立場では難しい。隊員はあくまでもカウンターパートである研修のトレーナーを通じて実習の支援に係っていくべきであり、そのほうがトレーナー自身の向上にもなってよい。また、高度な教科内容を教えることも語学力の面から難しい。身近な材料を使ってできる実験や観察といった Practical Works の普及や紹介を活動の中心に据えるべきと考える。

(21) 今後の協力の必要性はどうか。必要な場合、どのような活動に重点を置くべきか。

上記のようなスタンスで考えるなら、協力隊の支援に対するニーズはまだ高いと思う。

今後の重点活動として考えられるのは、リーダートレーナーやティーチャートレーナーの支援と簡易実験器具の製作と普及である。したがって今後は RSTC 内に留まらず、必要があればトレーナーの学校を訪問する等して現場に即した活動を行っていくことが望ましい。

#### 4. 職員に対する調査事項と調査結果

調査対象者 10名:	教科・階次・配属先		教科・階次・配属先
小樽 幸治	化学・H8-3・BU	高井 志野	生物・H10-1・BU
依田 将之	地学・H9-1・WVSU	松崎 瑞樹	物理・H10-1・WVSU
下里 信博	地学・H9-2・BU	茂木 紀子	生物・H10-1・WVSU
山梨 仁美	化学・H9-2・WVSU	多田 朋子	生物・H10-1・ADDU
佐藤 昌宏	化学・H9-2・ADDU	千葉 恵市	物理・H10-1・ADDU

質問事項	よくできた	できた	普通	できがた	無回答
------	-------	-----	----	------	-----

##### (1) 職員の主な活動はなにか。

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 教員研修の指揮、補助</li> <li>● 教材の開発</li> <li>● 巡回指導</li> <li>● RSTC の活動補助</li> <li>● 学校訪問</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● ニュースレターの作成</li> <li>● 星座観測会</li> <li>● コンピュータ研修</li> <li>● 簡易教材の作成、配布(販売)</li> <li>● 実験のハンドアウト集作成</li> </ul> |
|---|---|

##### (2) 活動の成果(業務実績)はなにか。

別紙参照

##### (3) 業務環境は確保されたか。

オフィスの提供	5	2	3	—	—
---------	---	---	---	---	---

- 以前も特に問題はなかったが、今年(1998年)10月にRSTCビルが新築された(DOSTの援助)ため非常に良かった。(BU)
- RSTCのスタッフ(所長)とJOCVのいる建物が別々であり、連絡がスムーズでない場合がある。(WVSU)
- RSTCにあるコピー機を使えないことがある。(WVSU)

実験室の使用状況	2	3	2	3	—
----------	---	---	---	---	---

- 以前までのRSTCでは水が不便であったが、新しく建物が完成し、改善された。(BU)
- 実験室の水場のシンクが浅すぎて、ガラス器具などが洗にくい。(WVSU)
- 機材を保管する場所が十分でない。(WVSU)
- 雨漏りがするのでよくない。(WVSU)
- これまでのRSTC事務所には実験室がなかったが、12月に別のキャンパスへ移動するため、この問題は解消される。(ADDU)

適切なカウンターパートの任命	3	3	1	3	—
----------------	---	---	---	---	---

- 同じ部屋に机を置いてもらっており、一緒に仕事ができるので良い。(BU)
- 新しいカウンターパート(以前のカウンターパートはマニラで修士過程を履修中)は人間的には良い人であるが数学専攻の教員であり、効果的な補助ができない。(BU)
- 授業の準備等で忙しそうであり、なかなかRSTCの仕事に集中できないようである。(BU)
- カウンターパートが(距離的に)離れていて、あまり頻りにRSTCに来ないため一緒に活動できないことが多い。(WVSU)
- RSTCのスタッフは授業数をもっと軽減されるべきである。(WVSU)
- カウンターパートは付属高校の教員であり、現在まではなかなか一緒に活動する時間が取れなかったが、事務所の移動が終われば、改善される。(ADDU)
- 一緒に活動する時間が取れないと技術移転をするのは難しい。(ADDU)
- もっと、公立高校の教員と一緒に仕事をしたい。(ADDU)
- カウンターパートは付属高校の教員であり、一緒に地方の高校へ巡回することができない。(ADDU)

	すべて RSTC から	部分的に RSTC から	まったく 出ない	無回答
通信費	5	3	2	---

- 他の RSTC スタッフに比べると、シニア隊員との連絡や各サイト間での連絡等、長距離電話が多いため、JOCV の電話代が非常に高く、現在の RSTC の経済状態では申請しにくい。(BU)
  - JOCV は RSTC に負担をかけるべきではないと思うので、JOCV が払ってもよいと思う。(BU)
- 1998 年の 5 月までは JOCV/JICA の予算から払っていたが、その後は RSTC で払ってもらっている。(ADDU)

旅費、交通費	5	5	---	---
--------	---	---	-----	-----

- 巡回指導時の船代等は RSTC より支給されており、助かっている。(BU)
- JICA から供与された車両を使用できる。ドライバーへの給料と、ガソリン代は RSTC が払っている。(BU)
- 1 日だけの出張であれば RSTC が JICA 供与の車両を出してくれるが、長期になる場合は、バス等の公共交通期間を利用する。その場合は、JOCV/JICA の予算から払っている。車両の運転手に時間外の給与を支払うのが困難なためである。(ADDU)
- 単車の貸与を申請したいが、200km 以上の移動距離になるため、それも難しい。(ADDU)

消耗品の供与	7	3	---	---
--------	---	---	-----	-----

- 特に困ったことはない。(BU)
- JOCV が活動に必要な消耗品(プリンターのインク等)が十分に供給されないことがある。(WVSU)
- RSTC でほとんどまかなってもらっている。(ADDU)

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

(4) 活動推進のために必要な支援は得られたか。

実験機材等	2	6	2	---	---
-------	---	---	---	-----	-----

- ガラス器具や pH ペーパー等の消耗品が不足している。(BU)
- 現在のところ、RSTC にある機材でまかなっている。(BU)
- RSTC の機材や薬品は十分であるが、問題は地方の学校にそういったものがないということである。(ADDU)

技術的側面	2	5	2	---	1
-------	---	---	---	-----	---

- 研修の運営等について助けてくれる。(BU)
- 技術面の支援は主に UP-ISMED の専門家から受けることができる。(ADDU)

(5) RSTC 所長との関係はどうか。

2	5	3	---	---
---	---	---	-----	-----

- 隊員の活動をよく理解している。/ 隊員の提案を取り入れてくれる。(BU)
- アイディアが豊富である。(BU)
- 隊員の活動を評価してくれると(所長はやさしくて、隊員の批評をしないので)、もっと効果的なサポートができるようになると思う。(BU)
- 時々、突然にスケジュールを変更したり、それについての情報をすぐには与えてくれなかったりして、準備等が大変なことがある。(WVSU)
- セミナーの前に、スタッフを集めたミーティングをもってほしい。(WVSU)
- 所長の裁量によっては JOCV が効果的に活動できていないと感じることがある。(WVSU)
- 忙しすぎて、かまってもらえないことが多い。この問題については所長の大学での仕事(副学部長)次第なので、なんとも言えない。/ RSTC 所長が非常に忙しいため RSTC の活動に集中できない。(ADDU)

(6) スタッフとの関係はどうか。

3	5	2	—	—
---	---	---	---	---

- 人によるが、概してよく働き、責任を全うする。(BU)
- 達前ではなく本音で話し合いをしてくれたら、活動を改善できると思う。(BU)
- RSTCに頻繁に来られない。
- JOCVを当てにしている。時々彼らの仕事をしなければならなくなる。(WVSU)
- セミナーの直前だけ出なく、いつもRSTCで仕事をするべきである。(WVSU)
- 大きな問題はないが、カウンターパートについては、改善の余地がある。カウンターパートは付属高校の教員であり、現在まではなかなか一緒に活動する時間が取れなかったが、事務所の移転が終われば改善される。  
(ADDU)

(7) 他の隊員との関係はどうか。

3	6	1	—	—
---	---	---	---	---

- いっしょに仕事をしていくのであるが、リーダーがいないため、チームとして効果的な活動ができない(個人的な活動が多くなり、チームとしている意味が薄れている)。
- リーダーがいれば改善されるのではないか。
- チームとしてはあまり効果的でない。
- もっとお互いに技術をシェアしあったほうがよい。
- 以前は活動や、活動に起因する問題に対してメンバー内で共通認識を持つためのミーティングを行っていた(隊員間でそういったミーティングが必要という認識があったため)。その際にやりたい活動の意見を出したりしていたが、現在は行っていない。必要が生じればまた行ってもよいと思うが、基本的には自主的に活動を進めている。

(8) シニア隊員との関係はどうか。

8	2	—	—	—
---	---	---	---	---

- JOCVの活動が円滑に進むようよくサポートしてくれている。
- とてもよく隊員をまとめてくれている。

(9) JICA 専門家との関係はどうか。

4	3	2	—	1
---	---	---	---	---

- 現時点で化学と物理の分野しか専門家がいらない。
- もっと助言をいただける機会があればよいと思う。
- 自分の担当の教科ではないが、質問をするとさまざまなアイデアや情報をいただけるので非常にありがたい。
- 専門家の方々は、経験・知識ともに豊富なので、マニラではなくもっと近くにいてくれたら、頻繁に連絡を取り合っ  
てたくさんのことを学べると思う。専門家の派遣においてはプロジェクト中は空席にならないほうがよいと思う。

(10) 活動を通じてRSTCスタッフや現地のトレーナー、教員にどのような効果があったと思うか。

技術移転

—	1	5	3	1
---	---	---	---	---

- 同一人物に技術移転をしつづけると、後任の隊員はより高い技術が要求される。
- 十分な時間がない。
- カウンターパートも日々の仕事に追われているので、積極的に働きかけていない。
- スタッフはとても忙しいので、技術移転のための十分な時間が取れない。
- 事務所の移転が完了すれば、カウンターパートとの活動時間が増えると思われるが、今はまだそれほど行われていない。たとえ、十分な活動時間が取れなくても、技術移転ができるよう、ハンドアウト集の作成を考えている。

プログラムの運営

—	2	4	3	1
---	---	---	---	---

- 運営についてはあまり関っていない。自分のやるべきことをやるだけである。
- 英語で動機付けをするのはむずかしい。

活動の成果	—	1	6	2	1
-------	---	---	---	---	---

- 準備が十分でないことがあり、あまり効果的でないことがある。
- デモンストレーション等をする機会が少ない。

活動の評価	—	1	6	2	1
-------	---	---	---	---	---

- 準備が十分でないことがあり、あまり効果的でないことがある。

教材開発	1	1	7	—	1
------	---	---	---	---	---

- カウンターパートの考えを聞きながら共に作成している。
- 教材開発では試行錯誤に時間がかかる。
- 現在、精力的に行っているし、今後も続けていく予定である。

教材の準備	—	4	5	—	1
-------	---	---	---	---	---

- カウンターパートが、授業の前に必要なものをきちんとそろえるようになった。
- 頼まれれば補助をしている。
- 研修で有効に使用できるハンドアウト集を作成の予定である。

(11) JOCV チーム派遣をどのように評価しているか	2	6	2	—	—
------------------------------	---	---	---	---	---

- 現在もなお、活動については試行錯誤中である。まだすべてにおいて評価はできない。
- 現在のままでは JOCV がいなくなったら RSTC の活動はどうなるのか。

プロジェクトの上位目標の点から	—	7	2	1	—
-----------------	---	---	---	---	---

- あまり明確でないため、どのような活動がふさわしいのかわかりにくい。
- 「低価格教材と簡易教材の普及」という具体的な目標にしてはどうか。
- 現時点では中等教育に向けての活動が主である。

プロジェクト目標の点から	1	6	2	—	1
--------------	---	---	---	---	---

- JOCV はもっと多くの時間をカウンターパートと一緒に活動しなければ、目標の達成は難しい。
- 巡回指導の回数は年々減少しており活動を強化しているとは言えない。
- 「プラクティカルワークを取り入れ、生徒達に理科に興味を持たせよう」という目標にしてはどうか。

目的(1)の点から	1	6	1	1	1
-----------	---	---	---	---	---

- 教員研修では JOCV はたくさんの実験を紹介する機会がある

目的(2)の点から	—	7	1	1	1
-----------	---	---	---	---	---

- 機材を供与してもあまり役に立たない。教材開発に力を入れるべきである。

目的(3)の点から	—	6	1	1	2
-----------	---	---	---	---	---

- この目標を達成するための活動をしていない。

目的(4)の点から	—	6	2	1	1
-----------	---	---	---	---	---

- 教材製作については紹介しているがそのメンテナンスについてはしていない。



コメント

- 「教員に実際に実験をさせる」、「機材の効果的な利用法を見つける」という目的にしてはどうか。
- 教育学部の大学生へのプレサービスをするほうがよいのではないか。
- 中等教育よりも初等教育に力を入れるほうがよいのではないか。
- RSTC スタッフは研修中に実験を取り入れない。もっと、実験や簡易教材を紹介するべきである。

(12) 要求されている活動に対して、自分の技術レベルをどう評価しているか。

—	2	5	2	1
---	---	---	---	---

- 教員の経験はあるが、教員に指導した経験はないので、RSTCへのJOCVの派遣は適切ではないと思う。
- 配属先は実際に教員である(あった)隊員を求めている。
- RSTC スタッフは授業内容の改善を補助してほしいと思っているが自分には十分な経験がない。

(13) 自分の語学力の向上はどうか評価しているか。

—	3	5	2	—
---	---	---	---	---

- 向上してはいるが、まだ十分ではない。
- いつも、英語か現地語で話すべきである。また、できるだけ、話をするようにしたい。
- カウンターパートがもっとそばにいれば語学力も向上すると思う。もっとたくさんの友人をつくって、(英語や現地語を)話すチャンスをふやしたい。

(14) 配属先(任地)の人々と交流はあるか。

—	6	4	—	—
---	---	---	---	---

(15) 同一の職場で複数の隊員が働くことの長所は何か。

- (ほかの隊員がいることによって)スムーズに職場になじむことができる。
- 情報、アイデア、技術の交換ができる。
- 協力してプロジェクト等を成功させることができる(1人では困難)。
- 現地スタッフと誤解が生じたときに(誤解を解くために)お互いに話し合ったり助け合ったりできる。/ 問題があるときに助け合える。
- すべての教科を統一した活動をするときに違う教科間で助け合える。
- 活動におけるいろいろなことを話し合うことができる。/ 情報、アイデアの交換ができる。/ が必ずしもおなじ事務所に一緒にいる必要はない。
- 継続して行える活動を開発できる。
- 安心する。

(16) 同一の職場で複数の隊員が働くことの短所は何か。

- RSTCのスタッフが、JOCV 同士を比べる傾向にあり、やりにくいことがある。
- 言語能力が伸び悩む(日本語が話せてしまう)。ほかのスタッフとのコミュニケーションとの面でも普段も英語を話すほうがよい。
- お互いに頼りあってしまう。
- 事務所 JOCV が孤立してしまう(日本語で話していると)。
- 派遣状況や、仕事の現状から判断すると、複数の隊員が同じ職場にいるメリットはあまり感じない。
- 募集の段階で「どういものがチーム派遣か」という説明がなかったが、前もって、そういった情報を隊員に与えておくことは必要ではないか(チームとしての向き、不向きを個人でも認識していると思うので)。
- 英語と現地語が上達しない。
- 日本人で集まってしまう傾向があり、現地の人々が近づきにくいのではないか。

(17) 業務以外に行った活動(日本への新聞発行等)があるか。

- 小学校や高校の授業で日本の文化や、歴史を紹介した。
- 日本語を教えている。
- 国際交流としての日本とフィリピンの小学生同士の文通を橋渡ししている。
- 大学の授業を補助した。(不定期)
- 日本語を大学の授業で教えたことがある。
- 教員研修ではなくて、生徒に授業をしたい。

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(18) INSET システムについて知っているか。

9	1
---	---

- ほかの教員研修ともっと調整をとればよいと思う。
- SMEMDP に関して言えば、たった一度の研修を受けただけで、トレーナーとして研修を指導しなければならないシステムはよくない。
- NTP ではたくさんのことを学べたが RTP ではそうはいかない。RTP ではトレーナーの経験が乏しすぎる。
- 研修のなかでで同じピックを扱っていることがあり、もっと事前に連絡をとりあうべきである。
- SMEMDP では Region、Division と、研修が降りていくにしたがって、内容的にも徹底していない。また、予算的な関係で研修が行われていないところさえある。地方での展開を考えるのであれば、そのあたりの事情を考慮しなければならない。
- 地方で研修を開催する際には、どの研修にもリーダートレーナーをもっと活用するべきである。

(19) INSET システムに関することで何か得るものはあるか？

- RSTC の外に出ることができる(ほかの学校等に赴くチャンスができる)。

(20) パッケージ協力について知っているか。

7	3
---	---

(21) 中央 DOST の役割はなんだと思うか。

- RSTC の予算や設備のバックアップ。
- RSTC を統括/ RSTC の活動をサポートする。
- 中央レベルで他の省庁 (DECS 等) ともっと協力したほうがよい。

(22) 地方 DOST の役割はなんだと思うか。

- スポンサー(サティフィケートに名前が入っている)。

(23) 中央 DECS の役割はなんだと思うか。

- NTP の金銭的な補助。
- Region、Division に INSET の説明をする。
- それほど聞いているようには感じられない。
- コミュニケーション不足である。

(24) 地方 DECS の役割はなんだと思うか。

- RTP の指揮。
- メモランダムを発行して、教員を研修参加可能にしてくれる。
- 研修のコーディネーター。

その他の意見、コメント等

- JOGV は RSTC にいる時間を減らして、地方の学校に出るようにしていきたい。(すべてのサイト)
- 現在の状態(レポート作成、教材、ハンドアウト作り、ミーティング)では現場に触れる機会が少なく、何が必要とされているのかがわからない。(BU)
- 活動のためにリクエストした車が使えないことがある。(WVSU)
- RSTC に所属して学校巡回をしたい。できればカウンターパートと一緒にクラスター・トレーニング(小人数での研修)を行いたい。それが不可能であれば、学校に直接配属してほしい。(ADDU)
- 草の根巡回(地方での学校巡回)をするために、DECS とミニッツを結んでほしい。(ADDU)

## 5. 各種研修のトレーナーに対する調査事項と調査結果

調査対象者 32名:	指導した研修		指導した研修
Mrs. Evelyn M. Paguio	'97 RTP Chemistry	Mr. Reynaldo G. Segumpan	'96 RTP Elem. Sci.
Mrs. Amparo D. Binamira	'97 RTP Chemistry	Ms. Anita Estela M. Monroy	'97 RTP Physics
Ms. Ma. Karina Luth R. Discaya	'98 RTP Biology	Mr. Peter Ernie D. Paris	'98 RTP Biology
Ms. Marieta Martina V. Baliwas	'98 RTP Biology	Ms. Falconire T. Fernandez	'98 RTP Biology
Ms. Teresita Melinda P. Alanis	'98 RTP Biology	Ms. Charity Dedoroy-Escobin	'98 RTP Earth Sci.
Mr. Augustine A. Evangelio	'98 RTP Earth Sci.	Ms. E-mi Marisol Charina C. Valente	'98 RTP Earth Sci.
Ms. Mereldin Adela M. Deris	'98 RTP Earth Sci.	Ms. Imelda M. Espigar	'98 RTP Elem. Math
Ms. Emelina D. Emaes	'98 RTP Elem. Sci.	Ms. Rosita C. Reyes	'97 RTP Chemistry
Ms. Maria Fe Gay Aton	'96 RTP Chemistry	Ms. Milagros M. Francisco	'97 RTP Chemistry
Ms. Angelita M. Atabay	'96 RTP Earth Sci.	Mr. Eusebio G. Agson	'97 RTP Physics
Ms. Teresita F. Del Valle	'96 RTP Earth Sci.	Dr. Carmencita R. Omictin	'98 RTP Biology
Ms. Corazon T. Sabio	'96 RTP Earth Sci.	Mr. Rey B. Pueblo	'98 RTP Biology
Ms. Edilberta S. Yu	'96 RTP Elem. Math	Ms. Cecile Clarinda D. Pasino	'98 RTP Biology
Mr. Eustaquio O. Jimenez, Jr.	'96 RTP Elem. Math	Ms. Cecilia R. Chus	'98 RTP Earth Sci.
Mr. Alfredo B. Sison	'96 RTP Elem. Math	Ms. Ma Luisa F. Montecillo	'98 RTP Elem. Sci.
Ms. Remedios A. Abarintos	'97 RTP Chemistry	Ms. Ninie C. Del Rosario	'98 RTP Elem. Sci.

### 1. 研修について

調査事項	はい	いいえ	普通	不明	無回答
------	----	-----	----	----	-----

#### (1) 研修はスムーズに実施されたか。(事前連絡を含む)

12	15	4	1	1
----	----	---	---	---

- (DECS 職員の都合で)3 回もスケジュールの変更があった。
- 少なくとも研修の 3 ヶ月前にはコミュニケーション (DECS から各学校への知らせ) を送付してほしい。(今回は研修前日に受け取ったという人もいた。もちろん郵便事情などがあることはわかるが、それにしても遅すぎる)
- 開催地が町から遠く、RSTC で機材や薬品を用意したが運ぶのが大変だった。とくに移動用の車も用意されなかったの、自分たちでたくさんの機材を運ばなければならなかった。やはり、開催地は RSTC のある大学がよい。

#### (2) 研修の運営はどうであったか。

18	9	4	1	—
----	---	---	---	---

- 参加費が高いため、借金をしてまで受講した受講者が数人いた。材料費の立て替え分の返金やトレーナーの謝礼等の支払いも大幅に遅れた。
- 研修を運営する人や、ファシリテーターも適切な研修を受けるべきである。

#### (3) 研修の準備はしっかりできていたか。

16	13	3	—	—
----	----	---	---	---

- チェックリストを作るなどして万全を期した。
- ほかのトレーナーや JOCV とほぼ一年間かけて準備をした。
- 研修の前々日 (土曜日) になるまで、研修で使う材料がそろわなかった。これでは完全な準備は難しい。
- DECS で買い揃えてもらった材料に不備がたくさんあった (金額が大きくなるため、DECS の職員を通して注文し、業者にそろえてもらうのであるが、質や量・内容に問題がある)。
- 研修が目の前に迫ってから「お金がない」というのではなく、前もって研修用のお金を取っておくべきである (システムがそうになっていないならその改革から始めたほうがよい)。

#### (4) 研修でとりあげられたトピックについての知識はどうであったか。

17	14	1	—	—
----	----	---	---	---

- 研修までに詳しいトピックや準備についてはほかのトレーナーや JOCV と話し合ったりした。
- 準備期間に不明な点等については JICA 専門家にたずねるなどして明らかにすることができた。

## 5. 各種研修のトレーナーに対する調査事項と調査結果

調査対象者 32名:	指導した研修		指導した研修
Mrs. Evelyn M. Paguio	'97 RTP Chemistry	Mr. Reynaldo G. Segumpan	'96 RTP Elem. Sci.
Mrs. Amparo D. Binamira	'97 RTP Chemistry	Ms. Anita Estela M. Monroy	'97 RTP Physics
Ms. Ma. Karina Luth R. Discaya	'98 RTP Biology	Mr. Peter Ernie D. Paris	'98 RTP Biology
Ms. Marieta Martina V. Baliwas	'98 RTP Biology	Ms. Falconire T. Fernandez	'98 RTP Biology
Ms. Teresita Melinda P. Alanis	'98 RTP Biology	Ms. Charity Dedoroy-Escobin	'98 RTP Earth Sci.
Mr. Augustine A. Evangelio	'98 RTP Earth Sci.	Ms. E-mi Marisol Charina C. Valente	'98 RTP Earth Sci.
Ms. Meraldin Adela M. Deris	'98 RTP Earth Sci.	Ms. Imelda M. Espigar	'98 RTP Elem. Math
Ms. Emelina D. Emaas	'98 RTP Elem. Sci.	Ms. Rosita C. Reyes	'97 RTP Chemistry
Ms. Maria Fe Gay Aton	'96 RTP Chemistry	Ms. Milagros M. Francisco	'97 RTP Chemistry
Ms. Angelita M. Atabay	'96 RTP Earth Sci.	Mr. Eusebio G. Agson	'97 RTP Physics
Ms. Teresita F. Del Valle	'96 RTP Earth Sci.	Dr. Carmencita R. Omictin	'98 RTP Biology
Ms. Corazon T. Sabio	'96 RTP Earth Sci.	Mr. Rey B. Pueblo	'98 RTP Biology
Ms. Edilberta S. Yu	'96 RTP Elem. Math	Ms. Cecile Clarinda D. Pasino	'98 RTP Biology
Mr. Eustaquio C. Jimenez, Jr.	'96 RTP Elem. Math	Ms. Cecilia R. Chua	'98 RTP Earth Sci.
Mr. Alfredo B. Siason	'96 RTP Elem. Math	Ms. Ma Luisa F. Montecillo	'98 RTP Elem. Sci.
Ms. Remedios A. Abarintos	'97 RTP Chemistry	Ms. Ninie C. Del Rosario	'98 RTP Elem. Sci.

### 1. 研修について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

(1) 研修はスムーズに実施されたか。(事前連絡を含む)	12	15	4	1	1
------------------------------	----	----	---	---	---

- (DECS 職員の都合で)3 回もスケジュールの変更があった。
- 少なくとも研修の 3 ヶ月前にはコミュニケーション(DECS から各学校への知らせ)を送付してほしい。(今回は研修前日に受け取ったという人もいた。もちろん郵便事情などがあることはわかるが、それにしても遅すぎる)
- 開催地が町から遠く、RSTC で機材や薬品を用意したが運ぶのが大変だった。とくに移動用の車も用意されなかった。自分たちでたくさんの機材を運ばなければならなかった。やはり、開催地は RSTC のある大学がよい。

(2) 研修の運営はどうであったか。	18	9	4	1	---
--------------------	----	---	---	---	-----

- 参加費が高いため、借金をしてまで受講した受講者が数人いた。材料費の立て替え分の返金やトレーナーの謝礼等の支払いも大幅に遅れた。
- 研修を運営する人や、ファシリテーターも適切な研修を受けるべきである。

(3) 研修の準備はしっかりできていたか。	16	13	3	---	---
-----------------------	----	----	---	-----	-----

- チェックリストを作るなどして万全を期した。
- ほかのトレーナーや JOCV とほぼ一年間かけて準備をした。
- 研修の前々日(土曜日)になるまで、研修で使う材料がそろわなかった。これでは完全な準備は難しい。
- DECS で買い揃えてもらった材料に不備がたくさんあった(金額が大きくなるため、DECS の職員を通して注文し、業者にそろえてもらうのであるが、質や量・内容に問題がある)。
- 研修が目の前に迫ってから「お金がない」というのではなく、前もって研修用のお金を取っておくべきである(システムがそうになっていないならその改革から始めたほうがよい)。

(4) 研修でとりあげられたトピックについての知識はどうであったか。	17	14	1	---	---
------------------------------------	----	----	---	-----	-----

- 研修までに難しいトピックや準備についてはほかのトレーナーや JOCV と話し合ったりした。
- 準備期間に不明な点等については JICA 専門家にたずねるなどして明らかにすることができた。

(5) 講義や実験をしっかり行えたか。 

16	16	—	—	—
----	----	---	---	---

(6) 研修の参加者により刺激を与えることができたか。 

15	17	—	—	—
----	----	---	---	---

- 研修用の実験のほかにも簡単にできる実験手法等の紹介をした。
- 参加者はプラクティカルワークに重点をおいた研修をもっと実施してほしいと言っていた。

(7) 研修の参加者に興味づけができたか。 

18	14	—	—	—
----	----	---	---	---

- トピックにまつわる個人的な経験を話したりした。
- 高価な器具や薬品がないとできないと思われていた実験を身近な材料でできることが参加者にとっては新鮮だったようである。

(8) トレーナーとしての熱意、態度はどうだったか。 

23	9	—	—	—
----	---	---	---	---



(9) いつ研修の準備をしたか。(複数回答)

長期休業中	19
土曜、日曜	19
放課後	8
準備する時間がなかった	1
その他	3

コメント

- (リーダートレーナーの都合がつかなくなって急に頼まれたので)研修の2日前に準備した。
- DECSの地方事務所に対して、「RSTCでJOCVと一緒に研修の準備ができるよう」に事務所のほうから学校側に便宜を図ってもらえるようリクエストしたい。
- 空いている時間を使って準備したが、通常の授業は夕方まであるのでなかなか思うように進まなかった。
- 週末を使って一度、「デリバリースキルトレーニング」を行った。
- 準備にあたって、DECSの地方事務所から召集を受けることがあったが、交通費の支給がなかった(オフィシャルの召集ではなかった)。

(10) どのように研修の準備をしたか。(複数回答)

ほかのトレーナーと一緒に	21
RSTCスタッフと一緒に	20
JOCVと一緒に	19
ひとりで	6
その他	1

コメント

- (頼まれて地方研修でトレーナーをすることになったので)、全国研修を受けた数学の指導主事と一緒に準備をした。
- 指導主事と一緒に準備した。
- ほかのリーダートレーナーと一緒に準備を行いたかったが、さまざまな制約があり(たとえば、それぞれが遠く離れていたり、あるトレーナーは私立高校の教員であるトレーナーはCHED傘下の学校の教員だったりしてDECS地方事務所の集まる範囲を超えていたり)、なかなか集まる機会を作ることができなかった。
- 機材や薬品は予備実験用には支給されないので、ひとりで行うのは困難であった。

(5) 講義や実験をしっかりと行えたか。 

16	16	---	---	---
----	----	-----	-----	-----

(6) 研修の参加者により刺激を与えることができたか。 

15	17	---	---	---
----	----	-----	-----	-----

- 研修用の実験のほかにも簡単にできる実験手法等の紹介をした。
- 参加者はプラクティカルワークに重点をおいた研修をもっと実施してほしいと言っていた。

(7) 研修の参加者に興味づけができたか。 

18	14	---	---	---
----	----	-----	-----	-----

- トピックにまつわる個人的な経験を話したりした。
- 高価な器具や薬品がないとできないと思われていた実験を身近な材料でできることが参加者にとっては新鮮だったようである。

(8) トレーナーとしての熱意、態度はどうだったか。 

23	9	---	---	---
----	---	-----	-----	-----

質問事項	回答数
------	-----

(9) いつ研修の準備をしたか。(複数回答)

長期休業中	19
土曜、日曜	19
放課後	8
準備する時間がなかった	1
その他	3

コメント

- (リーダートレーナーの都合がつかなくなって急に頼まれたので)研修の2日前に準備した。
- DECS の地方事務所に対して、「RSTC で JOCV と一緒に研修の準備ができるよう」に事務所のほうから学校側に便宜を図ってもらえるようリクエストしたい。
- 空いている時間を使って準備したが、通常の授業は夕方まであるのでなかなか思うように進まなかった。
- 週末を使って一度、「デリバリースキルトレーニング」を行った。
- 準備にあたって、DECS の地方事務所から召集を受けることがあったが、交通費の支給がなかった(オフィシャルの召集ではなかった)。

(10) どのように研修の準備をしたか。(複数回答)

ほかのトレーナーと一緒に	21
RSTC スタッフと一緒に	20
JOCV と一緒に	19
ひとりで	6
その他	1

コメント

- (頼まれて地方研修でトレーナーをすることになったので)、全国研修を受けた数学の指導主事と一緒に準備をした。
- 指導主事と一緒に準備した。
- ほかのリーダートレーナーと一緒に準備を行いたかったが、さまざまな制約があり(たとえば、それぞれが遠く離れていたり、あるトレーナーは私立高校の教員であるトレーナーは CHED 傘下の学校の教員だったりして DECS 地方事務所の裁量範囲を超えていたり)、なかなか集まる機会を作ることができなかった。
- 機材や薬品は予備実験用には支給されないの、ひとりで行うのは困難であった。

2. 研修で扱われた教材について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

(1) 研修の参加者の興味・関心を引いたか。

18	14	—	—	—
----	----	---	---	---

- できるだけ現地で手に入る材料を用いたので関心は高かったと思う。
- ものによっては(たとえば入手が困難な材料で作った教材の場合)あまり関心を示さなかった。
- 概して若い教員の関心のほうが高かったようである(やる気がある)。(調査者のコメント)

(2) 研修の参加者の理解を促進したか。

20	11	1	—	—
----	----	---	---	---

- 実際には、新任教員や、その年(研修に参加した年)からその教科を教え始めた、という教員も参加者にまじっており、研修で使用した教材は参加者の理解を促進していると思われる。
- UP-ISMED で撮影した教材写真など、JICA 専門家のご好意で実費を払って焼き増ししていただき、参加者にも希望者に配布(販売)したが、視聴覚教材は特定の分野においてたいへん効果的である。
- 研修を指導する側にとってもしつかりした教材があるほうがやりやすい。

(3) 自分の学校でも準備可能であったか。

10	14	5	2	1
----	----	---	---	---

- すぐには無理であるが、必要なものについては校長に頼んだ(比較的手に入りやすい、安価な材料であるため提案しやすい)。
- バランガイ(自治体のようなもの)の小さな学校や田舎の学校ではそろえるのが難しい材料もある。
- 薬品が非常に高価であるので、その代替品があれば学校でも容易に準備できるようになるであろう。
- 高価な薬品を購入するために特別理科クラスの生徒の保護者に資金探しを呼びかけている。
- 学校行政のほうから実験用プリントや教材の作成(リプロダクション)をサポートしてほしい。
- 薬品は学校では高すぎて買えない。

(4) 現地で手に入る身近な材料が使われていたか。

11	20	1	—	—
----	----	---	---	---

- かなりローカルなものが使われているが、やはり、地方大都市に出向かなければ(マニラまで行く必要はないが)、手に入らないものが多い。
- すべての材料は地方ではそろわない(特に薬品は高価であり、買うのも大変)。
- もっといろいろな材料を使って試してみるべきである。
- 提供されるのであれば喜んで使うが、自分たちで替わりの材料を見つけようとする姿勢はなかなか見られなかった。(調査者のコメント)

(5) 授業で使用する頻度はどうか。

8	22	—	—	2
---	----	---	---	---

- 単元やトピックによるが、その教材が使える授業ではいつも使っている。
- 最大限に使用している。

(6) 改良等を含め、自分の学校で作って見たか。

8	20	2	—	2
---	----	---	---	---

- 生徒に同じ物を作らせた。
- 改良はむずかしい。
- いくつかの教材については代替品を見つけて使用している。
- 実際に教室の棚にたくさんの同じ手作り教材が並んでいるのをよく見かけた。無い物は工夫して代替品を使っているものの、原理が理解されておらず、形だけになっているものも見つけられた。(調査者のコメント)



2. 研修で扱われた教材について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) 研修の参加者の興味・関心を引いたか。	18	14	---	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>できるだけ現地で手に入る材料を用いたので関心は高かったと思う。</li> <li>ものによっては(たとえば入手が困難な材料で作った教材の場合)あまり関心を示さなかった。</li> <li>概して若い教員の関心のほうが高かったようである(やる気がある)。(調査者のコメント)</li> </ul>					
(2) 研修の参加者の理解を促進したか。	20	11	1	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>実際には、新任教員や、その年(研修に参加した年)からその教科を教え始めた、という教員も参加者にまじっており、研修で使用した教材は参加者の理解を促進していると思われる。</li> <li>UP-ISMEDで撮影した教材写真など、JICA 専門家のご好意で実費を払って焼き増ししていただき、参加者にも希望者に配布(販売)したが、視聴覚教材は特定の分野においてたいへん効果的である。</li> <li>研修を指導する側にとってもしっかりした教材があるほうがやりやすい。</li> </ul>					
(3) 自分の学校でも準備可能であったか。	10	14	5	2	1
<ul style="list-style-type: none"> <li>すぐには無理であるが、必要なものについては校長に頼んだ(比較的手に入りやすい、安価な材料であるため提案しやすい)。</li> <li>バランガイ(自治体のようなもの)の小さな学校や田舎の学校ではそろえるのが難しい材料もある。</li> <li>薬品が非常に高価であるので、その代替品があれば学校でも容易に準備できるようになるであろう。</li> <li>高価な薬品を購入するために特別理科クラスの生徒の保護者に資金探しを呼びかけている。</li> <li>学校行政のほうから実験用プリントや教材の作成(リプロダクション)をサポートしてほしい。</li> <li>薬品は学校では高すぎて買えない。</li> </ul>					
(4) 現地で手に入る身近な材料が使われていたか。	11	20	1	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>かなりローカルなものが使われているが、やはり、地方大都市に出向かなければ(マニラまで行く必要はないが)、手に入らないものが多い。</li> <li>すべての材料は地方ではそろわない(特に薬品は高価であり、買うのも大変)。</li> <li>もっといろいろな材料を使って試してみるべきである。</li> <li>提供されるのであれば喜んで使うが、自分たちで替わりの材料を見つけようとする姿勢はなかなか見られなかった。(調査者のコメント)</li> </ul>					
(5) 授業で使用する頻度はどうか。	8	22	---	---	2
<ul style="list-style-type: none"> <li>単元やトピックによるが、その教材が使える授業ではいつも使っている。</li> <li>最大限に使用している。</li> </ul>					
(6) 改良等を含め、自分の学校で作ってみたか。	8	20	2	---	2
<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒に同じ物を作らせた。</li> <li>改良はむずかしい。</li> <li>いくつかの教材については代替品を見つけて使用している。</li> <li>実際に教室の棚にたくさんの同じ手作り教材が並んでいるのをよく見かけた。無い物は工夫して代替品を使っているものの、原理が理解されておらず、形だけになっているものも見うけられた。(調査者のコメント)</li> </ul>					

3. 隊員について

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(1) 協力隊員は研修にいたか。

27	5
----	---

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

隊員が研修にいた場合

(2) どんな仕事をしていたか、またどう評価するか。(複数回答)

	15	4	—	—	—
講師	21	4	—	—	—
演示実験	20	4	—	—	—
(トレーナーの)アシスタント	21	3	—	—	—
見学	20	2	—	—	—
協力					

- ・ 隊員は大変協力的であった。
- ・ 研修中もずっとそばにいて、困ったときには助けてくれた。
- ・ 講義は担当しなかったが、いつもサポートしてくれた。
- ・ (研修中だけでなく)リーダートレーナーと一緒に遅くまで残って準備も手伝ってくれた。
- ・ 研修準備や予備実験を一輪に行った。
- ・ 現状では隊員がいないと予備実験をする場所や機材の調達は不可能に近い。

(3) 講習の内容について十分な知識を持っていたと思うか。

25	4	—	—	3
----	---	---	---	---

- ・ 十分な知識があり、研修でのトピックについてもいろいろな助言をくれた。

(4) 語学力はどうだったか。

9	19	4	—	—
---	----	---	---	---

- ・ ときおりコミュニケーションが困難なこともあるが、理解できるので問題ではない。
- ・ 言葉が不十分でも、実際に実験や図などで示してくれるので問題ない。
- ・ わからないときがあるがカウンターパートが補足説明してくれる。
- ・ 発音が悪いのでわからないことがある。

(5) 熱意、態度はどうだったか。

29	3	—	—	—
----	---	---	---	---

- ・ いつでも一生懸命やってくれる。/ 頼りになる。
- ・ 隊員は研修で大変役に立っていると思う。
- ・ JOCV は研修を大変よくサポートしてくれている。

4. その他

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(1) INSET システムについて知っているか。

21	11
----	----

- ・ 早くスクールレベルまでカバーできるようになってほしい。
- ・ DECS は必ずしも理数科に力を入れていないと思う。
- ・ 教育技術を向上させるために有効なシステムである。
- ・ 本当に効果的な教員研修のシステムになることを望んでいる。
- ・ 現在行われている種々の教員研修をもっと調整することができれば効果的になると思われる。

3. 隊員について

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(1) 協力隊員は研修にいたか。

27	5
----	---

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

隊員が研修にいた場合

(2) どんな仕事をしていたか、またどう評価するか。(複数回答)

	15	4	---	---	---
講師	21	4	---	---	---
演示実験	20	4	---	---	---
(トレーナーの)アシスタント	21	3	---	---	---
見学	20	2	---	---	---
協力					

- ・ 隊員は大変協力的であった。
- ・ 研修中もずっとそばにいて、困ったときには助けてくれた。
- ・ 講義は担当しなかったが、いつもサポートしてくれた。
- ・ (研修中だけでなく)リーダートレーナーと一緒に遅くまで残って準備も手伝ってくれた。
- ・ 研修準備や予備実験を一緒に行った。
- ・ 現状では隊員がいないと予備実験をする場所や機材の調達は不可能に近い。

(3) 講習の内容について十分な知識を持っていたと思うか。

25	4	---	---	3
----	---	-----	-----	---

- ・ 十分な知識があり、研修でのトピックについてもいろいろな助言をくれた。

(4) 語学力はどうだったか。

9	19	4	---	---
---	----	---	-----	-----

- ・ ときおりコミュニケーションが困難なこともあるが、理解できるので問題ではない。
- ・ 言葉が不十分でも、実際に実験や図などで示してくれるので問題ない。
- ・ わからないときがあるがカウンターパートが補足説明してくれる。
- ・ 発音が悪いのでわからないことがある。

(5) 熱意、態度はどうだったか。

29	3	---	---	---
----	---	-----	-----	-----

- ・ いつでも一生懸命やってくれる。/ 頼りになる。
- ・ 隊員は研修で大変役に立っていると思う。
- ・ JOCVは研修を大変よくサポートしてくれている。

4. その他

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(1) INSETシステムについて知っているか。

21	11
----	----

- ・ 早くスクールレベルまでカバーできるようになってほしい。
- ・ DECSは必ずしも理教科に力を入れていないと思う。
- ・ 教育技術を向上させるために有効なシステムである。
- ・ 本当に効果的な教員研修のシステムになることを望んでいる。
- ・ 現在行われている種々の教員研修をもっと調整することができれば効果的になると思われる。

SMEMDP について

- SMEMDP は他の研修と日程が重ならないようにしたほうがよい。JOCV の協力や使用する機材に影響(機材使用のリクエストが重複したりする)ができる。
- トレーナーやJOCV が技術や知識を持っていても時間や材料の制約があるため、なかなか効果的にそれらを伝えることができない。DECS の役割として、その業務をもう少し円滑に(時間をかけずに)行えるようにするなどして、研修の成功のために尽力してほしい。
- SMEMDP の全国研修で学んだことはとても重要でためになることであった。現在、プラクティカルワークの概念を生徒に伝えている。
- SMEMDP の地方展開にもっと予算を与えてほしい。
- 参加者を期待する数だけ集めたいならば、もっと早くからアナウンスしておくべきである。
- RTP、DTP は時間が少なすぎる。
- リーダートレーナーは RTP を指揮するだけでなく、学校レベルでも研修を持つべきである。
- 全国研修でトピックを選ぶときには教科書を参考にしてほしい(教科書もしくは指導要領に即した内容のトピックを選んでほしい)。
- ソースブックには授業へ応用できる内容があり、役に立っている。
- 全国研修の内容はだいたい 20%程度しか現場で応用できない。
- RTP のトレーナーは授業数を削減されるべきである(Region XI ではその提案が認められたが、結局有効なアクションはとられなかった。現在、それを認めた行政官は異動のため違う地域に移ってしまった)。

(2) INSET システムに関することで何か得るものはあるか?

15	17
----	----

- 異動のためのポイントを稼げる。
- 日本での研修が受けられる。
- 自分の持つ知識を伝達する機会。
- 謝礼金がもらえる。
- 証書(サーティフィケート)がもらえる。
- DTP に係ったとき、1 ペンも謝礼が出なかった。準備をするのに生徒に手伝ってもらって、彼らにご飯を食べさせるのであるが、それはすべて自費である。これでは今後、研修に係るのを躊躇してしまう。
- 謝礼金が(当初の金額より)目減りしたりすると、今後の研修指導へのやる気も目減りする。

(3) パッケージ協力について知っているか。

22	10
----	----

- 初等教育のリーダートレーナーに日本の大学で研修を受けるチャンスを与えてほしい。
- 高校の教員にも日本で研修を受けるチャンスを与えてほしい。
- 数学の JOCV も入れてほしい。
- このプログラムを今後も続けてほしい。

その他の意見、コメント等 (日常の授業に対しての要望等も含む)

- DECS の職員はあまりあてにならない。
- JOCV は実験を取り入れるなどして、日常の授業を改善してくれる。
- 教材は低学年の生徒にこそ必要なので、もっと簡単なものが必要である。
- 行政官も適切な研修を受けるべきである。内容等を知らないでモニターはできない。
- JOCV のモバイル・トレーニングはもっと遠くまでサービスをしてほしい。
- 小学校では基本的な実験器具等が不足している。特に自作できない器具についてはなすすべがない。
- 教科書が足りない(生徒 1 人に 1 冊わたっていない)。
- 実験室がない。
- 生徒が教科書を楽しんで勉強できるようにもっと擬似的(シュミレーション)な活動を行いたい。
- 実験等を取り入れるためあと 20 分か 30 分ほど授業時間を増やしたい(現在、すべての学校ではないが、数学は 40 分だったり、地学を取り入れているカリキュラムではその授業は 60 分で行われている学校がある)。
- 理科の教科書はもうすこし長い時間割り当てられるべきである。そうすることによって、もっと多くの情報を生徒に伝えられるし、実験も時間内に終わることができる。

- 教材や、実験器具が足りない。
- DOSTからの援助で入っている機材のいくつかは使い方がわからない。
- 学校によっては水の供給がないところもあり、実験を行うのが困難である。
- 視聴覚教材がもっと必要である。
- 薬品が足りない(高価で買えない)。
- 機材の修理が必要である。
- 消耗品に対するサポートが必要。(教員に対する研修が必要。参考にできる)本が必要。
- AVルームが必要。日常の授業を改善するために、もっと教材開発の方法や改良の方法を知りたい。
- 器具の使い方を学べる研修が必要。現時点で、教員にその授業案をつくる能力がないので、ブラクティカルワークを取り入れた授業案の例があればそれがほしい。
- ブラクティカルワークアプローチの技術をアップデートしたい。
- いろいろな状況を与えて生徒たちに検証させ、Critical Thinking Skillを向上させたい。
- 生徒たちにもっと実験等のハンズ・オンアクティビティをさせて、さまざまな概念を関連付けさせたい。
- 教材作成の技術を実験に取り入れ、生徒の興味を深めたい。
- 国内外の印刷物を参考文献として、生徒に対するブラクティカルワークアプローチを発展させる。
- 視聴覚教材に生徒たちをもっと触れさせ、学習をサポートしたい。
- 教員が用いている教育技法を調査して効果を検証するべきである。
- 生徒や教員の資質を向上させるためにもっと個別指導を通して働きかけたい。
- 研修の評価の後に行政官がポスト・カンファレンスをもち、教員の技術を向上させる(巡回)。
- 短期、長期の計画をたて、実効前、実行中、実行後で何が必要であるかを調査する。
- すべての研修の後で評価を行い、次回の改善につなげるべきである。
- 教員の動機付けができるような新しい技術の導入が必要。
- どんな小さな学校でもできるように、実験は簡素化したほうがよい。
- 技術などを学べるのでJOCVとチーム・ティーチングをしたい。
- デリバリースキル研修は役に立った。
- インプロバイズもいいが、すべての機材や教材がそうやって作ることができるわけでもない。
- もっと基本の、たとえば生徒が興味を持つようなよい実験室や作業場所、また顕微鏡のような基本的な機材はどんな小さな学校にも供与されるべきである。そして、研修はフィリピンのほとんどの学校できっちり実践できるようなもの続けてやっていくべきである。
- 公立学校のほとんどは基本的な理科機材がないため、チョーク&トークでの授業になってしまう。

## 6. 各種研修の受講者に対する調査事項と調査結果

調査対象者 25名:	参加した研修	参加した研修
Ms. Alicia R. Gaisa	'95 Mobile School Earth Science	Ms. Kriemhilda H. Gajo '98 RTP Biology
Ms. Anita C. Olegario	'97 DTP Chemistry / '98 DTP Biology / '97 Mobile Bio.	Ms. Merlinda D. Gorriceta '98 RTP Biology
Mrs. Gloria F. Bermejo	'97 RTP Chemistry	Ms. Minolaluz M. Billena '98 RTP Biology
Ms. Jocelyn O. Velitario	'97 RTP Physics	Ms. Nenita J. Lara '98 RTP Biology
Ms. Quennie C. Arcwga	'98 DTP Biology	Mr. Gelito C. Penas '98 RTP Earth Sci.
Ms. Purisima P. Escobal	'98 RTP Biology	Mr. Pepito V. Losentes '96-'97 Mobile Trng.
Ms. Lourdes P. Castrouesde	'98 RTP Earth Sci.	Dr. Carmncita R. Omictin '98 Delivery Skill
Ms. Lyne A. Buban	'98 RTP Earth Sci.	Ms. Laura V. Cespon '98 Delivery Skill
Ms. Ardelita U. Gonzales	'98 Outreach for JICA assisted school	Ms. Carmen V. Ragonton '96 RTP Earth Sci.
Mr. Garry C. Canto	'97 SAMSI Physics	Ms. Alma A. Camahelan '97 RTP Chemistry
Ms. Ma Lorovi E. Calle	'98 Prj. RISE 1 <sup>st</sup> Batch	Ms. Ofelia J. Jinkuan '97 RTP Physics
Ms. Ma Vida Corazon V. Sullesta	'98 Prj. RISE 2 <sup>nd</sup> Batch	Ms. Raquels G. Catalan '98 RTP Biology
Ms. Edna D. Dominguez	'96 RTP Earth Sci.	

### 1. 研修について

調査事項	満足	やや満足	満足しない	不明	回答数
(1) <u>研修は有益であったか。</u>	18	7	—	—	—
• 研修のアウトプットを各々の学校へ持ちかえり生徒たちに還元できた。(Project RISE・Region6)					
(2) <u>研修に満足したか。</u>	12	12	1	—	—
• 金曜、土曜に行う研修はスケジュール的にかなりきつい。また研修の計画もあまり整理されておらず日々のトピックの順番にも一貫性がなかった。(Project RISE・Region6)					
(3) <u>研修の準備はしっかりできていたか。</u>	15	9	1	—	—
(4) <u>研修は滞りなく執行されたか。</u>	12	11	1	—	1
• コミュニケーションが悪い。研修の前日に届いた。(Project RISE・Region6)					
(5) <u>研修の運営はどうであったか。</u>	12	10	3	—	—
• 研修によっては参加費がとても高いものもあり、小さな学校では教員を参加させることができない。(Region6)					
• アローワンス(研修中に出る食費、交通費他)の支給が遅れた。(夏期研修、Project RISE・Region6)					
(6) <u>研修の内容はどうであったか。</u>	12	12	1	—	—
• 研修で紹介されたいくつかの機材や教材は自分たちの学校では応用できない。(Project RISE・Region6)					

## 6. 各種研修の受講者に対する調査事項と調査結果

調査対象者 25名:	参加した研修		参加した研修
Ms. Alicia R. Gaise	'95 Mobile School Earth Science	Ms. Kriemhilda H. Gajo	'98 RTP Biology
Ms. Anita C. Olegario	'97 DTP Chemistry / '98 DTP Biology / '97 Mobile Bio.	Ms. Merlinda D. Gorriceta	'98 RTP Biology
Mrs. Gloria F. Bernejo	'97 RTP Chemistry	Ms. Minolaluz M. Billena	'98 RTP Biology
Ms. Jocelyn O. Velitario	'97 RTP Physics	Ms. Nenita J. Lara	'98 RTP Biology
Ms. Quennie C. Arcwga	'98 DTP Biology	Mr. Gelito C. Penas	'98 RTP Earth Sci.
Ms. Purisima P. Escobal	'98 RTP Biology	Mr. Pepito V. Losentes	'96-'97 Mobile Trng.
Ms. Lourdes P. Castrouesde	'98 RTP Earth Sci.	Dr. Carmncita R. Omictin	'98 Delivery Skill
Ms. Lyne A. Buban	'98 RTP Earth Sci.	Ms. Laura V. Gespon	'98 Delivery Skill
Ms. Ardelita U. Gonzales	'98 Outreach for JICA assisted school	Ms. Carmen V. Ragonton	'96 RTP Earth Sci.
Mr. Garry C. Canto	'97 SAMSI Physics	Ms. Alma A. Camahalan	'97 RTP Chemistry
Ms. Ma Lorovi E. Calle	'98 Prj. RISE 1 <sup>st</sup> Batch	Ms. Ofelia J. Jinluan	'97 RTP Physics
Ms. Ma Vida Corazon V. Sullesto	'98 Prj. RISE 2 <sup>nd</sup> Batch	Ms. Raquees Q. Catalan	'98 RTP Biology
Ms. Edna D. Dominguez	'96 RTP Earth Sci.		

### 1. 研修について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>研修は有益であったか。</u>	18	7	---	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>研修のアウトプットを各々の学校へ持ちかえり生徒たちに還元できた。(Project RISE・Region6)</li> </ul>					
(2) <u>研修に満足したか。</u>	12	12	1	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>金曜、土曜に行う研修はスケジュール的にかなりきつい。また研修の計画もあまり整理されておらず日々のトピックの順番にも一貫性がなかった。(Project RISE・Region6)</li> </ul>					
(3) <u>研修の準備はしっかりできていたか。</u>	15	9	1	---	---
(4) <u>研修は滞りなく執行されたか。</u>	12	11	1	---	1
<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーションが遅い。研修の前日に届いた。(Project RISE・Region6)</li> </ul>					
(5) <u>研修の運営はどうであったか。</u>	12	10	3	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>研修によっては参加費がとても高いものもあり、小さな学校では教員を参加させることができない。(Region6)</li> <li>アローワンス(研修中に出る食費、交通費他)の支給が遅れた。(夏期研修、Project RISE・Region6)</li> </ul>					
(6) <u>研修の内容はどうであったか。</u>	12	12	1	---	---
<ul style="list-style-type: none"> <li>研修で紹介されたいくつかの機材や教材は自分たちの学校では応用できない。(Project RISE・Region6)</li> </ul>					

2. 研修で扱われた教材について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>興味・関心を引いたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材作成のワークショップは必要である。(Outreach・Region6)</li> </ul>	9	16	—	—	—
(2) <u>理解を促進したか。</u>	10	12	2	—	1
(3) <u>自分の学校でも準備可能であったか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材関係は低学年にはむずかしいので使っていない。</li> </ul>	7	12	4	1	—
(4) <u>現地で手に入る身近な材料が使われていたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>材料のいくつかは地方では見つけることができなかった。</li> </ul>	7	16	1	—	1

3. トレーナーについて

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>講習の準備をしっかりとっていたか。</u>	17	8	—	—	—
(2) <u>講習の内容をしっかりと理解していたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>ディスカッションが少なく、ハンズ・オンアクティビティが多かった。トレーナー4人のうち2人はその教科の専門ではなかった。(RTP・Earth Sci.・Region6)</li> </ul>	15	9	1	—	—
(3) <u>講習をスムーズにおこなったか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>1日に4トピックあり、きついスケジュールだった。RTPは10日間では短すぎる。(RTP・Chem.・Region11)</li> </ul>	13	12	—	—	—
(4) <u>参加者によい刺激を与えることができたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>新しい技法や技術を学べた。(Outreach・Region6)</li> </ul>	15	9	—	—	1
(5) <u>参加者に興味づけができたか。</u>	16	9	—	—	—
(6) <u>熱意、態度はどうだったか。</u>	16	9	—	—	—

4. 隊員について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>協力隊員は研修にいたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>隊員はもっと研修にかかわるべきである。(Project RISE・Region6)</li> <li>研修だけではなく、普段も質問等をするためにたずねていくと、丁寧に対応してくれる。</li> </ul>	24	1	—	—	—



2. 研修で扱われた教材について

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>興味・関心を引いたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材作成のワークショップは必要である。(Outreach・Region6)</li> </ul>	9	16	—	—	—
(2) <u>理解を促進したか。</u>	10	12	2	—	1
(3) <u>自分の学校でも準備可能であったか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>教材関係は低学年にはむずかしいので使っていない。</li> </ul>	7	12	4	1	—
(4) <u>現地で手に入る身近な材料が使われていたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>材料のいくつかは地方では見つけることができなかった。</li> </ul>	7	16	1	—	1

3. トレーナーについて

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
(1) <u>講習の準備をしっかりとっていたか。</u>	17	8	—	—	—
(2) <u>講習の内容をしっかりと理解していたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>ディスカッションが少なく、ハンズ・オンアクティビティが多かった。トレーナー4人のうち2人はその教科の専門ではなかった。(RTP・Earth Sci.・Region6)</li> </ul>	15	9	1	—	—
(3) <u>講習をスムーズにおこなったか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>1日に4トピックあり、きついスケジュールだった。RTPは10日間では短すぎる。(RTP・Chem.・Region11)</li> </ul>	13	12	—	—	—
(4) <u>参加者により刺激を与えることができたか。</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>新しい技法や技術を学べた。(Outreach・Region6)</li> </ul>	15	9	—	—	1
(5) <u>参加者に興味づけができたか。</u>	16	9	—	—	—
(6) <u>熱意、態度はどうだったか。</u>	16	9	—	—	—

4. 隊員について

質問事項	Yes	No
(1) <u>協力隊員は研修にいたか。</u>	24	1

- 隊員はもっと研修にかかわるべきである。(Project RISE・Region6)
- 研修だけではなく、普段も質問等をするためにたずねていくと、丁寧に対応してくれる。

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

隊員が研修にいた場合

(2) どんな仕事をしてきたか、またどう評価するか。(複数回答)

講師	12	5	—	—	—
演実実験	17	5	—	—	—
(トレーナーの)アシスタント	14	4	—	—	—
見学	10	2	—	—	—
協力	14	2	—	—	—

(3) 講習の内容について十分な知識を持っていたと思うか。

19	5	—	—	1
----	---	---	---	---

- 隊員は準備をきっちりするし、知識については問題ない。

(4) 語学力はどうだったか。

2	16	6	—	1
---	----	---	---	---

- カウンターパートがいるので問題はない。
- 時々誤解が生じるので気をつけなければならない。

(5) 熱意、態度はどうだったか。

22	2	—	—	1
----	---	---	---	---

5. 研修後について

(1) 授業で使用する頻度はどうか。

6	17	1	—	1
---	----	---	---	---

- 単元やトピックによるが、その教材が使える授業ではいつも使っている。

(2) 改良等を含め、自分の学校で作ってみたか。

11	8	4	—	2
----	---	---	---	---

6. その他

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

(1) INSET システムについて知っているか。

9	16
---	----

- それぞれの研修が足りないところを補い合えるようにとよい。
- DECS は他の教科に比べて理数科に力を入れている。
- プラクティカルワークに焦点を置いている。

SMEMDP について

- RTP はもっと時間が必要。
- RTP に参加するのに、学校は参加費を出してくれなかった。(Region5)

(2) INSET システムに関することで何か得るものはあるか?

3	22
---	----

- 交通費が支給される。

質問事項	よくできた	できた	普通	できなかった	無回答
------	-------	-----	----	--------	-----

隊員が研修にいた場合

(2) どんな仕事をしていたか、またどう評価するか。(複数回答)

講師	12	5	---	---	---
演実実験	17	5	---	---	---
(トレーナーの)アシスタント	14	4	---	---	---
見学	10	2	---	---	---
協力	14	2	---	---	---

(3) 講習の内容について十分な知識を持っていたと思うか。

19	5	---	---	1
----	---	-----	-----	---

- 隊員は準備をきっちりするし、知識については問題ない。

(4) 語学力はどうだったか。

2	16	6	---	1
---	----	---	-----	---

- カウンターパートがいるので問題はない。
- 時々誤解が生じるので気をつけなければならない。

(5) 熱意、態度はどうだったか。

22	2	---	---	1
----	---	-----	-----	---

5. 研修後について

(1) 授業で使用する頻度はどうか。

6	17	1	---	1
---	----	---	-----	---

- 単元やトピックによるが、その教材が使える授業ではいつも使っている。

(2) 改良等を含め、自分の学校で作ってみたか。

11	8	4	---	2
----	---	---	-----	---

6. その他

質問事項	Yes	No
------	-----	----

(1) INSET システムについて知っているか。

9	16
---	----

- それぞれの研修が足りないところを補い合えるようにとよい。
- DECS は他の教科に比べて理数科に力を入れている。
- プラクティカルワークに焦点を置いている。

SMEMDP について

- RTP はもっと時間が必要。
- RTP に参加するのに、学校は参加費を出してくれなかった。(Region5)

(2) INSET システムに関することで何か得るものはあるか？

3	22
---	----

- 交通費が支給される。

(3) パッケージ協力について知っているか。

13	12
----	----

- 公立高校の教員にも日本で研修を受けるチャンスを与えてほしい。

その他の意見、コメント等(日常の授業に対する要望等も含む)

- 教科書の最後のほうに出てくるトピックについての研修が必要。
- 多くの教員にデリバリースキル研修を経験してほしい。
- 本が足りない。
- 機材がない。
- コンピュータがない。
- 薬品がない。
- 実験室に実験用の机がないので実験ができず、多くの生徒が外に出ていってしまう。
- 生徒に電池やワークシートを持ってこさせるのは気が引ける。
- より効果的に授業を進められるようクラスの人数をもっと少なくしたい。
- IGP(インカム・ジェネレーション・プログラム)として、タンドゥアイ(フィリピンのラム酒)のビンなどを生徒に集めてこさせ、それを売ったお金で薬品などの補充をしている。
- もっと、生活に根付いた(化学の)現象を紹介して生徒に興味を持たせたい。

## 7. 各モデル地域での関係者に対する調査結果

### A. Region5での口頭インタビュー

#### DECS RO V (教育省第5地方事務所)

Mrs. Amy Denlega Chief Secondary Director, Secondary Education Division

INSETについてはよく知っている。

RTP(リージョナル・トレーニング・プログラム)をきっちり実践した。というのも、地方事務所のトップの人たちが協力的であり、研修に関して、そのための予算を取っておいてくれたからである。

研修を行う際に、もっとも問題になるのがお金に関することである。もし、スポンサーが支出をカバーできなかつたら教員は参加することができない。仮にお金はないのに研修を行った場合、内容は順番に悪いものになる。

JOCV はとても素晴らしい活動をしている。

ときに、語学力の問題があるが、伝えたいことは理解できるし、彼らの技術力とカウンターパートとの連携で、大きな問題とはなっていない。

Ms. Marilyn D. Dimeano Regional Science Supervisor, Secondary Education Division

パッケージ協力のことは知っている。

日本での集団研修に参加した際に説明された。

INSET についても、責任者であるため知っている。

JOCV の仕事は高く評価している。技術力に問題はない。ときおり言葉のバリアがあるように感じるが大きな問題ではない。現在、教員誘導研修(新任研修)を計画中。日本での研修を見て、ぜひフィリピンにもとりいれるべきだと考えた。(新任の教員が手本とする教員は良い人材ばかりではない。新任の時期こそ、今後の良い教員を育成するのに重要な時期である)

Ms. Celerina B. Donor Education Supervisor (Math)

INSET のことを知っている。

NTP(ナショナル・トレーニング・プログラム)は高く評価しているが、それは開催地やトレーナーに恵まれているからである。

RTP、そしてDTP(ディビジョン・トレーニング・プログラム)と、降りてくるにしたがって、その評価は下がる。

問題は運営資金である。なぜ、JICA は RTP や DTP の援助をしないのか？

リージョン5では RTP は上司の配慮によって、予算が確保されているのでよかった。夜間セッションなど、時間も有効利用できたし、内容も実りあるものであった。

PWA(プラクティカルワークアプローチ)は興味を引き起こさせるが、準備と実施に時間がかかる。もし、授業で取り入れるなら、40分では授業を終えることができない。(数学の場合)

JOCV は良い活動をしている。語学力は10段階の6程度である。

#### DECS Division Office (教育省地区事務所)

Mrs. Emelina Emaas Education Supervisor / Division of Sorsogon

INSET システムの概要については知っている。NTP に参加し、RTP や DTP にも関わっているからである。

しかし、パッケージ協力についてはあまりよく知らない。

DTPに関しては、自分はよく貢献した。当時 DECS 本管に派遣されていた村山短期専門家が、「これは DTP のモデルディビジョンになる」と絶賛したほどである。

JOCV は DTP を見学し、その様子をレポートにまとめてくれた。

BU-RSTC は DTP に関しては特に活動を予定していなかったが、JOCV が進んで開催地に赴いた。

提案としては、INSET を効果的にすすめるには、ナショナルレベルだけではなく、ディビジョンレベルまで予算的なサポートが必要である。

ディビジョンオフィスが予算を捻出できない場合、有効な情報や技術は現場の教員までは届かないことになり、非常にもつたない。現場の教員は教材をそれぞれの学校に持ちかえり、普段の授業で利用すべきである。

JOCV のモービルスクール(巡回指導)はよい活動である。教員はハンズ・オンに焦点を絞った活動を望んでいる。しかし、1日や2日というのは非常に短いし、もっと頻度も必要である。

JOCV は RSTC だけではなく、もっと、学校レベルに派遣されるべきである。したがって今のままでは人数が足りない。

技術力、語学力ともに大きな問題はない。JOCV の知識は教員のそれを超えているし、研修参加者は、JOCV の言うことが理解できている。ときおり、参加者が理解できないときは自分が通訳になっていた。

Ms. Josefina A. Soledad                      Education Supervisor I-Science / Division of Camerías Norte

INSET システムの概要は知っている。NTP、RTP、DTP とともに何らかのかたちで聞いている。

初等理科の分野で NTP にも参加し、RTP を指導した。そして、DTP も行ったが、JOCV はそこでモニターをしてくれ、助かっている。JOCV は良い活動をしている。

### DOST Region V (科学技術省第5地方事務所)

Prof. Hipolito Aycardo                      Director IV/ Office In-Charge

'98 年 1 月からの臨時的ポジションなので、あまりパッケージ協力や INSET について知らない。

DOST のリージョナルオフィスは研修に関する通達事項を受け取り、それをディビジョンに送付するのが役割である。

Ms. Consuelo L. Gillego                      Senior Research Specialist II

パッケージ協力や INSET システムについてはよく知らない。

INSET というのはすべての種類の現職教員研修のことを指すと思っていた。

JOCV の活動を見学したことがあるが、彼らはとてもよくやっている役立っている。現職教員はあまりプラクティカルワークにはなじみがないので、JOCV の技術は彼らに教えるのには十分である。

言葉はそれほど大きな問題ではない。なぜなら彼らには一緒に仕事をしているカウンターパートがいるからである。

### RSTC staff

Dr. Nora L. Ucup                              Director

JOCV はプレサービスからはじめるのがよい。彼らのバックグラウンドや年齢ではいきなり教員研修と行うには無理があるように思われる。教育方法などについて十分な知識のない新卒の隊員が、苦手な英語で、多数の何年も経験のある教員を教えるのでは彼らの長所が生かせない(彼ら自身もためらいを感じている)。それならば、まずは C/P とともに、大学の教育学部の学生を相手に、デモや授業をはじめ(少なくとも 1 学期間)、教えることを経験し、それから教員研修にかかわるのが妥当である。もしくは日本で教員経験のある人材の派遣が望まれる。RSTC としてはプレサービスにも力を入れたいので

資格的には、修士があればもっとよい。

そうはいつでも、JOCV は今までよくがんばってきたし、彼らのおかげで、RSTC の活動は活発になった。彼らの姿勢は高く評価しているし、人間的にも申し分ない。

C/Pとの間柄もとてもよい。彼ら(C/Pたち)は若いのでJOCVとうまくやっていける。経験豊富なスタッフもいるが、彼女などは、学ぼうとする姿勢があるし、まったく問題ない。2ウェイでの技術移転(JOCV から技術、知識、C/P からはコンセプトや言葉)が行われており、お互いに補い合う関係である。

JOCV/JICA に対しては、マニラでのミーティングが多すぎることを指摘したい。ときにマニラでのミーティングのために活動が犠牲になってしまうことがある。また、JOCV メンバーのところに遊びに来る日本人も、「来ないで」とは言わないが、多すぎるのは考えものである。

## B. Region6での口頭インタビュー

### DECS RO VI (教育省第6地方事務所)

Ms. Maria Cabag

Education Supervisor, EED

JOCV はよくがんばっていると思う。

初等教育専門の JOCV もほしい。

たとえ言葉に問題があろうとも、日本人の持つアイデアや知識をかいたい。

SMEMDP は概してうまくやっているが、校長や Superintendent の裁量で、算数や理科の研修にお金を割いてもらえないことがあり、高い研修料を必要とする研修には人が集まりにくい。

WVSU にドミトリーができればかなり状況はよくなるだろう。(研修料のほとんどは宿泊と食事に費やされるため)

以前は初等と中等の研修を一緒にやっていたが大変なので昨夏の研修では分けて実施した。

今回、初等はメモを早く回していたからよかったが、それでも 75%の参加率だった。

DECS のコンピュータートレーニングと日程が重なっていたため、宿泊のアレンジが大変だった。

会場のアレンジに RSTC は協力してくれず、自身で部屋探しから行った。また研修中の人手も、独自のついで(彼女の夫が副学長)なんとかなった。しかしこういった部分は大学に位置している RSTC が手を回してくれると DECS はもっとアドミニストレーションに集中できる。

DTP のモニタリング等続けたいが、事務所にまとまったお金がない。当初から、そういった分の予算を保持しておくべきである。

RTP のトレーナーを DTP に巻き込みたい。そのためにも、やはり予算が必要である。

トレーニングを行うにあたっては、RSTC の協力がもっと必要である。MOA に書いてあるそれぞれの責任を読むと、RSTC (DOST)は RTP を予算面で援助することになっているし、機材や設備についても協力することになっているにもかかわらず、これまで、まったくなかった。(この件については、DOST のスタッフに聞いてみた。「RTP に対して」と言及されていないが、プラクティカルワークの研修に対するサポートの予算は DOST から RSTC におろしているそうである。その予算は RSTC の管理であるので、そのマネージメントの詳しい部分まではわからないのが現状である。)

リージョナルの関係機関のきちんとした連携を作ることが第一の課題である。

Mr. Tribio M. Berano

Education Supervisor II, SED

JOCV はよくがんばっている。現場の教員はもっと研修が必要だから、このような活動は好ましい。

昨夏の RTP のマネージメントで起こった問題(コミュニケーションの遅れ、参加者不足ほか)は、ダイレクターの不在とパラロパンガンサン(全国レベルの体育大会)の当番が Region6だったことに所以する。

メモが遅れたのは書類が回らなかったからで、発送しても、ディビジョンにたどり着かないことも多い(リージョナルできちん

とまわしても、日限どおりに教員の手元に届かないことがよくある)。

また、多くの校長先生は、理数科より体育に力を入れたがっている。それで、理数科の研修に人を出さなかった。

DTP はなかなか予算がなくて行えていないようだ。

DECS 地方事務所では RSTC の研修と別に、トレーナー集団を構成して研修をもつ計画がある。

### DECS Division Office (教育省地域事務所)

Ms. Ma. Myra S. Jamili                      Division Science & Math Coordinator/ Division of Iloilo City

JOCV は星座観測会等、教員や生徒に対していろいろな活動をしてきている。

今年初めて、JOCV に DTP のアシストを頼んだ。準備等ではなく、当日のデモのようなものである。こちらからレターを出した。

DTP は RTP が終わったらすぐに実行することになっているが、今年の高校生物、高校地学はまだである。しかし、初等理科はもう終了した。大抵は RTP のトレーナーを招いて行っている(地の利を生かしている)。予算の面では問題がない。なぜならばイロイロ市は大きく、人口も多いので、たくさん税金が入るからである(この地域が教育分野にあてる予算は税金の 6% だそうである。それをさらに研修、文化事業、校舎建築...と振り分けていく)。しかし、サポートがあればもう少し長い期間の研修ができると思われる(現在は 3 日間)。

自分が RTP (Elem. Science/ 1996) に参加した後から、研究授業のようなことを始めた。PWA を取り入れたデモ授業の見学をすすめている。これは Superintendent など、Administrator を招いて行っている。研修については、Administrator のために、実際の授業の研修ではなく、モニターや見学の手法などを学べるようなものが望ましい。

### RSTC staff

Dr. Bernabe B. Cocjin                      President, WVSU

JOCV はよくやっている。大きな問題は特にない。

ラボラトリーの機材の使い方等教えてくれるのはありがたい。また JOCV が Pre-service にかかわるのは賛成である。

RTP では現状で場所を貸す (host) 役割のみ。

Regional Steering Committee は過去 3 年間に 2 度ほどしか開かれず、仮に開かれて、出席してもやることが何もない状態である。

Dr. Purisima R. Remorin                      Director

JOCV に大きな問題はない。

それぞれがんばってやっているが、言葉の壁がある職員もいる。

カウンターパート (C/P) の任命に関して、うまく行っていないところがあるのはわかっている。

今期 (11 月) に、DOST の奨学生が付属高校に復職するのでその人を新しい C/P に任命したい (現在、活動に問題のある教科の C/P に関して)。

JOCV のカウンターパートである教員の授業数を減らす件は今なお、大学にリクエストを続けているがなかなか認めてもらえない。

そのような制約がある中で(限られた時間の中で)、最大限の活動をしていると自負している。

隊員の C/P の役割は、「研修等の計画を立て、実行し、フィードバックを次に生かす」という一連の作業を協力して成し遂げることであり、目下実践中である。しかし上述の問題もあり、さらに改善が必要である。



Ms. Nenita P. Sornito

Former Director

自分が所長を勤めたときは、研修のマネージメントに集中し、研修の中ではクラスを持たなかった。

### C. Region 11 での口頭インタビュー

#### DECS RO XI (教育省第 11 地方事務所)

Dr. Ursula C. Valderrama

Chief Secondary Director, SED

RTP のあと DTP をやっているが、今は特に Cluster-Based Training に力を入れている。これは RTP の講師と参加者、PASMEP、SEDP の研修者を招いて行っている。トピックは RTP の内容も参照している。また、そのあと、その Training に参加した教員は、学校レベルで研修会を開くことになっており、一回(1 日)の研修について、ひとつの技術を教えることに集中している。この方法は日本での集団研修の際に学んだ。

JOCV についてはまだ、あまりなじみがない。しかし、最近の隊員には会った。

(活動について、特に提案はなし)

Mr. Cecer Cole

Education Supervisor I, SED

RTP は特に問題はなかった。しいて言えば、最初の年(1996)に参加費があまりに高かったため、参加者が少なかったのは問題であった。なぜ、プロジェクトはナショナルレベルだけをサポートするのか？実際に問題を抱えているのはいつでも底辺のほうだ。次の年は DOST のサポートによって、かなり参加者の負担が軽減された。今年は、初等教育の方では、Division Superintendent の裁量で予算が出て、100%の参加率(定員いっぱい)だった。

しかし、中等のほうでは、校長の権限が大きいので、100%にはいたらなかった。やはり RTP の参加費は研修としては高すぎる。(研修費は MOOE という予算から出るらしい)

JOCV の活動は、評価できる。ハンズオン・アクティビティを取り入れた研修や、サイエンスサーカスショーは教員・生徒に好評である。サーカスショーは生徒に実験の原理などわかりやすくしてあってよい。

今後、数学担当の JOCV が入ってくるともっとよくなると思う。

DECS の学校に配属になるのも良いと思うが、その場合、DECS-Central から、正式なコミュニケーションが必要である。

(日本への研修参加者であるため、パッケージ協力や INSET のことは知っていたが、INSET はやはり、一般的な言葉として捕らえられているようだ。)

Ms. Rebecca C. Torres

Education Supervisor I (Math)

RTP については大きな問題はない。

JOCV はたいへん役立っている。

もっと、活動の幅を広げたいならば、RSTC を通して DECS 地方事務所の所長にレターを書いて、存在をらしめることから始めなければならない。

SMEMDP のことは知っているが、それとパッケージ協力、INSET システムの意味とのつながりは明確ではない。

DECS Division Office (教育省地域事務所)

Ms. Corazon T. Sabio Education Supervisor/ Division of Davao City

JOCV の活動についてはサイエンスサーカスショーやモービルトレーニングなどを見たことがある。

それらは教員や生徒のためになる。

JOCV の活動についての要望は具体的にはアイデアはなし。

Mr. Alfredo B. Siason Education Supervisor I/ Division of Davao del Norte

NTP に参加し、RTP で指導した。

JOCV は RTP に見学に来ていたので知っている。活動についての提案は特にないが、理科だけでなく、数学の分野にも

JOCV が必要だと思う。

Mr. Eustaquio C. Jimenez, Jr. Education Supervisor I/ Division of Davao Oriental

NTP に参加し、RTP で指導した。

JOCV の活動に対しては、特に提案等はない。

RTP の準備に関しては Mrs. Funa が事前に 4 回ほどミーティングの機会をもってくれたので、その際にレッスンプランを作ったりできた。

DTP にはもっと予算的な裏づけが必要と考える。

RSTC staff

Prof. Perla E. Funa Director

JICA 機材供与校にはたくさんの使えない機材がある。フォローアップをしたほうがよい。JOCV が始めて ADDU に配属になったとき、それから始めていた。あのような機材が有効利用できるようなるとよい。

JOCV は教材製作に秀でている。

JOCV がより幅広く活動をするためには大学と DECS 地方事務所の間で MOA が必要である。

SMEMDP では、地方に行くほど予算的に研修を行うのが難しいというのが普通である。これは周知のことなのだから、

DECS は研修のための予算を最初から確保しておくべきである。

また、研修日数が減少していくのはカスケード形式の最大の問題点である。実情としては、学校レベルでは年間を通して、もっと長い期間の研修が必要である。

パッケージ協力については以前は RTP 等に関しての JOCV の役割が明確でなかった(隊員の何人かは RTP にそれほど関らなかった)。時間がたつにつれて明確になってきたと思う。RSTC では当初から JOCV の役割があり、RSTC の活性化目標となっていたのでよかった。

パッケージ協力のプロジェクト期間がもうすぐ終了するにあたって、このプロジェクトは教員研修支援のある意味で“イントダクション”であり、今後の現職教員研修がどうなるのか、フィリピン政府の自助努力次第である。

JOCV が来たことによって、フィリピンの教育を見直す機会ももてた。彼らのおかげで、フィリピンの高校のカリキュラムはめ込みすぎであるということも分かった。実際 Ateneo de Manila では独自のカリキュラムを作成して、それを実践している授業を見るとわかるが、それは説明よりも、プロセス重視で、生徒にも考える力がついているように思える。

JOCV のカウンターパートの役割は、知識や技術を受け取るばかりではない。お互いの持っているものを交換して、よりいっしょにめあうことが望まれる。実際に過去の JOCV がわれわれに、「たかさんのことを学んだ」と言って帰国していったが、それを聞いたときは感動した。

7/11

フィリピン 青年海外協力隊  
「地方理数科教育向上プロジェクト」

隊員活動実績調査結果報告書  
(追加資料)

1998年11月25日提出

短期緊急派遣隊員 三宅 由利子

## 8. PNVSCA に対する調査事項と調査結果

<u>調査対象者:</u>	<u>役職:</u>
Mrs. Virginia P. Davide	Director, PNVSCA
(協力隊担当のスタッフの協力あり)	

- (1) 理数科隊員の要請および派遣に関して問題があったか。
  - 特に問題はなかった。
- (2) シニア隊員の要請および派遣に関して問題があったか。
  - 特に問題はなかった。
- (3) JICA 事務所およびチーム派遣関係者との連携はどうだったか。
  - PNVSCA と JICA 事務所の連携はプロジェクトの受益者についての確認や活動サイトの選定など最小限のものであった。
- (4) DOST-SEI との連携はどうだったか。
  - PNVSCA と DOST-SEI の連携は RSTC から DOST-SEI を通じて提出される隊員派遣のリクエストの受けとりなど最小限のものであった。
- (5) 隊員およびプロジェクトの活動はどのようにモニタリングしたか。
  - 各隊員の提出する半年ごとのレポート・プロジェクトからの四半期報告や PNVSCA のスタッフによるサイト訪問によって行われた。
- (6) 隊員の長所、改善したいところは何か。
  - 長所: 現地で利用できる材料をつかって、理科の概念を演示できる。
  - 短所: 研修を行う際の言語能力(英語、現地語)が弱い。
- (7) 隊員が問題を抱えた時に、どのような対応をおこなったか。
  - 大抵は配属先や協力隊の責任者と話し合いの場を持って、問題解決にあたった。
- (8) プロジェクトの実績をどのように評価しているか。
  - モニタリングのための活動場所の訪問や隊員のレポート、またはパッケージコーポレーションの評価会議等から考えると隊員は非常によくがんばっていると思う。
- (9) 協力隊のチーム派遣という形態をどのように評価しているか。
  - その実績やプロジェクトサイトでの活動の様子を見ると、隊員は協力し合ってがんばっている。
- (10) 今後の協力の必要性についてどのように考えているか。
  - プロジェクトの効果を調査するために複数の機関が評価に携わるべきである。
  - 可能であるならば、全国規模でやってほしい。

## 9. DECS-CMT に対する調査事項と調査結果

<u>調査対象者 3人</u>	<u>役職:</u>
Ms. Ma Elsie C. Corpuz	Central Management Team
Ms. Paz Buenciaje	Central Management Team
Ms. Zaida T. Azcueta	Central Management Team

### (1) 協力隊のプロジェクトとどのように連携したか。

- 協力隊はパッケージ協力の計画、遂行、評価において大変協力的であった。
- 協力隊との連携は研修のトレーナーや受講者への技術移転において重要であった。
- 協力隊の活動は DECS によってしっかりサポートされていた。DECS の職員は教員研修のプログラムに彼らを組み込んでアレンジした。

### (2) 協力隊の実績をどのように評価しているか。

- 地方で展開されているそれぞれの活動によって評価されている。
- 協力隊は教材製作や機材の管理などの新しい方法を普及している点が評価されている。

### (3) 隊員を RSTC に配属したことについてどう考えるか。

- 協力隊は、RSTC で理数科教育における教員の資質を高めるために貢献している。
- 隊員の配属は RSTC の管轄だが、教員に対する活動をしているのだから DECS としっかり連携するべきである。
- 隊員の RSTC への配属は INSET の目的を遂行するための一助となっている。

### (4) 隊員の長所、改善したい点はなにか。

- 隊員は地方の人々と大変よい支援体制を作っている。
- 隊員はみんな、たいへん面倒見がよい。また勤勉で研修の際には トレーナーや研修受講者といつも遅くまで残って仕事をしていた。
- 彼らはプラクティカルワークやその応用、改善について知識がある。
- 会話能力を改善する必要がある。

### (5) 研修会では隊員はどのような役割を担っていたか。

- モービルトレーニングなどの巡回を行う。またさまざまな理数科の研修でコンサルタントの役割をしている。
- 隊員は教材の準備でトレーナーを助けている。また研修受講者の評価も支援している。ある隊員は受講者に対して動機づけを行っていた。
- 見学者としてモニターしたりアシスタントとしての役割を担っていた(RTP、DTP)

### (6) 研修会での隊員とトレーナーの連携はどうであったか。

- 隊員は大変協力的で支援を惜しまず、研修のトレーナーとよい関係を築いていた。
- 隊員はトレーナーとよく助け合っていた。
- 隊員は RTP のトレーナーやスタッフをよく支援していた。

### (7) 今後も JOCV の協力が必要か。必要な場合、隊員に期待したい役割、業務は何か。

- パッケージ協力では(プラクティカルワークの)現場の教員への普及を考えると、地方焼き直しの過程が必要である(ので隊員にそういった役割を期待したい)。
- 協力隊のプロジェクトは継続してもらいたい。隊員は RSTC のみでなく、DECS にも配属されるべきである。もっと人数を増やすとともに他の教科への支援も考えてほしい。
- 隊員はその知識と技術で評価されている。

### 10. UP ISMED に対する調査事項と調査結果

<u>調査対象者 9 人</u>	<u>役職:</u>	<u>役職:</u>
Dr. Vivien Talisayon	Director	Ms. Nora Nalda Science Education Specialist
Ms. Evelyn L. Josue	Science Education Specialist	Ms. Ceril T. Malicdem Science Education Associate
Ms. Eulalia N. Benfillo	Science Education Specialist	Ms. Lita D. Lebig Science Education Associate
Ms. Meree C. Tan	Science Education Specialist	Mr. Miguel C. Cano Science Education Associate
Ms. Marlens B. Ferido	Science Education Specialist	

#### (1) 協力隊のプロジェクトとどのように連携したか。

- (全国研修と地方研修で見たかぎり)成功したのではないが
- 隊員はこの SMEMDP で大変役に立っていた。
- 協力隊と UP ISMED の連携はよかった。

#### (2) 協力隊の実績をどのように評価しているか。

- 全国研修における隊員の役割がはっきりしていなかった。
- 全国研修の(特に隊員の配属されている地域から来た)参加者をよく助けていた。
- 隊員はその革新的なアイデアをカウンターパートだけではなく、他の教員とも共有し理科教育向上に貢献した。
- 隊員が作っている印刷物はよくできている。
- 予備実験をすることによって、その実験についてのコメントをくれる。
- ビコールにいる隊員はリーダートレーナーととてもよく研修をすすめていた。ある隊員はカウンターパートと一緒にセッションを担当していた。

#### (3) 隊員を RSTC に配属したことについてどう考えるか。

- 隊員と RSTC スタッフの間には 2 通りの技術移転がありよい関係である(隊員はスタッフの専門知識を高め、スタッフは隊員に教育技術を教えている)。
- 全国研修での様子を見てみると、隊員は RSTC でも活躍しているだろうと思う。
- RSTC は隊員にとって絶好の場所である。しかしもし、彼らが学校に配属されればなおよいと思う。
- 教員研修をサポートし、RSTC スタッフの知識や技術を高めると言う点においてよいと思う。
- ほかのティーチャートレーナーも隊員のサポートが必要なのではないか？

#### 隊員の長所、改善したい点はなにか。

- |        |  |
|--------|--|
| 長所     | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 隊員は地方研修で教材の準備によく貢献している。</li> <li>● 隊員は全国研修で参加者をよく補助していた。</li> <li>● 全国研修の際に、機材のセットアップなど手伝ってくれ、大変役に立っていた。</li> <li>● 勤勉でワーカホリックである/ 大変協力的である。</li> <li>● 大変親しみやすく、知っていることをできる限り教えてくれようとする</li> <li>● フィリピンの文化を尊重してくれる。</li> <li>● フィリピン語を学んだり、周囲に溶けこんでいる。</li> </ul> |
| 改善したい点 | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 現地語の会話能力を高めるとさらによい。</li> <li>● 研修中にトレーナーが講義をしている際に参加者の前でまちがいを指摘するのはよくない。それは研修が終わった後など、参加者がいないときにしてほしい。</li> </ul>   |

#### (5) 研修会では隊員はどのような役割を担っていたか。

- 全国研修でリーダートレーナーと同じように参加していた。
- 全国研修で見学者兼参加者であった。また実験の補助もしてくれた。
- 全国研修では大抵自分たちの配属されている地域からの参加者を補助している。
- 地方研修であるトピックを担当し、大変よくやっていた。イラストなどを用いて効果的に話を進めていた。
- 地方研修でファシリテーターをして補助をしていた。
- 地方研修でトレーナーを補助し、実験用の教材準備も手伝っていた。

11/11

(6) 研修会での隊員とトレーナーの連携はどうであったか。

- 全国研修では参加者を補助する以外にはなにもしていない。(もし隊員がトピックについてもっと学びたいのであれば、研修期間中だけでなく、準備期間に ISMED に来たほうがよいのではないかな? なぜなら、研修時にはすべての問題は解決されていて、受身の姿勢しかとれないからである。準備期間こそ、学ぶことがたくさんあるはずである。)
- 全国研修で、何人かのトレーナーは研修中に隊員によってまちがいを指摘された。概して彼らの助言や提案はトレーナーを助けてくれる。
- 地方研修中、大変よくトレーナーをサポートしている(特に技術的な部分)。また、プラクティカルワークをどのよう行うかという多くのすばらしいアイデアを出している。
- 地方研修でのトレーナーとの連携はよかった。

(7) 隊員の技術的なレベルをどう評価しているか。

- ある隊員はその専門分野に大変秀でていた。
- すばらしいと思う。
- 複雑な機材を使用して、説明をしたりデモをしたりする能力がある。
- その分野での専門として選ばれてきたのであるから問題はない。

(8) 今後も JOCV の協力が必要なか。必要な場合、隊員に期待したい役割、業務は何か。

- RSTC と隊員間の協力は続けるべきである。とくに、機材の使い方の指導等に重点をおくのがよい。
- たとえば、地方の学校の教員にプラクティカルワークを普及するなど、学校までその活動範囲を広げてはどうか? この場合、隊員は現地語に秀でているのが望ましい。
- 現地で手に入る材料での教材製作を行ってほしい。
- RSTC スタッフに教材製作の研修をしてほしい。
- 今後も協力は必要である。なぜなら、日本人は技術面で大変進んでいるからである。また彼らは理科の抽象的な事象を生徒たちが理解して記憶できるように、実験等を取り入れた活動の助けもしてくれるからである。
- JOCV の任務や役割はここに来る前に(研修に参加する前に) ISMED のスタッフにしっかり説明されるべきである。

7/14

フィリピン 青年海外協力隊チーム派遣

「地方理数科教育向上プロジェクト」

活動実績調査要約および調査者所見

1998年11月25日提出

短期緊急派遣隊員 三宅 由利子



協力隊チーム派遣プロジェクト活動実績調査 要約および調査者所見

青年海外協力隊 短期緊急派遣隊員

科学技術省・理科教育研究所 (DOST-SEI)

三宅 由利子

平成6年(1994年)から5年間の協力期間でフィリピン共和国に対する理数科教育開発パッケージ協力が開始されてから4年6ヶ月が経過し、終了時評価調査を行うことになりました。

パッケージ協力はプロジェクト方式技術協力部門(社会開発協力部)、無償資金協力部門、派遣事業部(個別派遣専門家)、研修事業部、青年海外協力隊事務局といったJICAの技術協力に関連した援助形態が連携しています。

われわれ青年海外協力隊はこれらの各部門との連携をとりながら、フィリピン国の理数科教師の質的向上を目指し、実践や観察を行うための手法を地方レベルに導入するためにチーム派遣「地方理科教育向上プロジェクト」として活動してきました。概要は以下のとおりです。

活動目標	地方における初等・中等学校理数科教員の資質向上	「RSTC の行う理数科教員資質(主に実験等実技能力)向上のための研修を強化する」というプロジェクト目標を掲げています。
活動場所	<ol style="list-style-type: none"> <li>第5行政地域(Region V) ピコール大学(国立) / 地方理科教育センター(BU-RSTC)</li> <li>第6行政地域(Region VI) 西ピサヤ大学(国立) 地方理科教育センター(WVSU-RSTC)</li> <li>第11行政地域(Region XI) アテネオデダバオ大学(私立) 地方理科教育センター(ADDU-RSTC)</li> <li>科学技術省・理科教育研究所 (DOST-SEI)</li> </ol>	<p>JICA 調査団とフィリピン側代表団によって決定された3ヶ所の「Regional Science Teaching Center (地方理科教育センター)」(以下 RSTC)です。</p> <p>フィリピンには RSTC の併設された大学が全国に15ヶ所ありますが、このうちルソン地域からピコール大学、ピサヤ地域からは西ピサヤ大学、ミンダナオ地域からはアテネオデダバオ大学にあるそれぞれの RSTC が協力隊の活動場所として選ばれました。</p> <p>なお隊員が活動を円滑に進められるようコーディネーター役としてシニア隊員が派遣されています。配属先は RSTC を通じて理数科教員研修等の運営・指導をしている科学技術省・理科教育研究所(以下 DOST-SEI)です。</p>
活動期間	1994年3月～現在に至る	<p>1994年9月に2名の協力隊員をBU-RSTCに派遣したのが地方での活動の地まりです(初代隊員は同7月に任地に派遣されていますが、マニラでの現地語訓練等を終えて任地に赴任したのは9月です)。</p> <p>なお初代シニア隊員は1994年の3月に赴任しています。</p>
派遣形態/派遣状況	各サイトに物理、化学、生物、地学それぞれの教科担当の隊員計4名をチームとして配置しています(チーム計12名)。上記4年4ヶ月間に計22名の隊員が派遣されています。現在活動中の隊員は10名です。(1998年12月にさらに2名が赴任予定)	<p>1995年6月にWVSU-RSTCに2名、同9月ADDU-RSTCに1名というように1年で各サイトに隊員が配属されました。詳しい派遣状況は調査結果1章を参考にしてください。</p> <p>シニア隊員は現在2人目です(1997年2月に交代)</p>

主な活動	教員研修の指揮、補助 教材の開発 巡回指導 学校訪問 等	各サイトでの状況が異なるため、一括して表記できません。詳細は調査結果の11章を参考にしてください。
活動実績	調査結果11を参考にしてください。	

各サイトに配属された隊員は上記のように活動を続けて来ました。1999年5月のプロジェクト終了にさきかけて、1998年12月に終了時評価が行われます。評価作業を行う際の基礎資料として過去約5年間にわたる隊員の活動実績、隊員チーム派遣の妥当性、効果、問題点等を調査・集計したものが別冊の「活動実績調査報告書」です。

本書では実績報告書の調査資料を要約し、調査者の所見を記してみたいと思います。

1. 「活動実績調査概要」

これには「いつ、誰が、どのようにして実績調査を行ったか」がまとめてあります。

隊員(シニア隊員も含む)の配属先を基点に行った調査なので、出張報告もかねて、プロジェクトサイトごとにわけてあります。実際の調査実績結果のデータは3サイトをまとめてひとつにしてあるため、これらの情報にはあまり意味がないように思えますが、たとえば各サイト(DOST・SEIは除く)の調査対象者のリストを見ていただければ、カテゴリーごとの対象者の数に偏りがあることに気づいていただけたと思います。この偏りが各RSTCの状況を表しているのではないかと考えます。

調査者としては第5行政地域・ピコール大学(BU)-RSTCが一番まんべんなくカテゴリーを網羅できたと感じています。

第8行政地域・西ピサヤ大学(WVSU)-RSTCは調査を行った人数が多いですが、これは調査者が以前このサイトで隊員活動を行っていたので、かなり自由に自分の判断で動き回れたことが一因です。このサイトでRSTC関係者が多いのは1997年にRSTCスタッフのほとんどが交替したためです。プロジェクト半ばで、それまで係ってきたスタッフは所長と秘書をのぞいてすべてRSTCからいなくなりました。(一方BU-RSTCはほとんど不変のスタッフで活動して来ています。)

第11行政地域・アテネオデダバオ大学(ADDU)-RSTCのスタッフは現在4名です。そのうち2名は外国人スタッフ(ボランティア)です。ADDUが私立大学であるため、公立高校の教員へのサービスが主業務となるRSTCにスタッフを配置できないためですが、正式なRSTCのスタッフがほとんどいないことがこのサイトでの隊員の活動に影響を与えていると思われる。

同様にして大学関係者やDECS関係者等の人数を見ると、隊員の活動にその総数がどの程度係っているのかが現れているように思います(調査対象者リストは各RSTCへ依頼してつくってもらいました。その際の条件が「隊員の活動によくかかわった人」でした)。ADDU-RSTCでは全科目のリーダートレーナーを対象に「デリバリースキルトレーニング」を実施してきた経緯があるため、隊員のいない教科のトレーナーに対しても調査を行うことができました。

2. 「1. プロジェクト運営に関する実績」

ここに示された実績は、中井シニア隊員(2代目シニア隊員)が提供してくれたものです。本プロジェクトに関する主に日本側からの投入についてまとめてあります。主な投入は以下の通りです。

- 隊員派遣実績(1998年～) 合計24名(1998年12月赴任の2名含む) シニア隊員2名
- 経費支出 合計9,170,482.70ペソ(約3700万円) — 1ペソ≒4円
- カウンターパート研修 合計4名 等

なお、フィリピン側の投入はDOST-SEIの報告書を参照してください。

### 3. 「II. 各 RSTC での活動実績」

ここに示されているのは各 RSTC における隊員の活動実績です。これは各サイトに配属されている隊員の協力を得て作成したものです。これまでに隊員が行った主な活動が「RSTC 主体の活動」、「隊員主体、または隊員独自の活動」、「教材開発」等に分けて示してあります。なかには「パッケージ協力関係の活動」という記述が見られますが、これは当初パッケージ協力における協力隊の位置付けがあいまいだったために、隊員にとって「パッケージ協力への貢献」=「プロ技の全国研修を地方で展開すること」になっていることに起因しています。要するに隊員の活動はほとんどが理数科教員の資質向上にかかわっています。したがって広い範囲でとらえるならばすべての活動がパッケージ協りに貢献していると考えられますが、パッケージ協力の PDM によるとプロジェクト目標が「現職教員研修の組織化」となっているため、その目標に直接係らないものもあり、あえてパッケージ協力と他の活動を分けるような表現になっていることをご理解いただきたいと思えます。

隊員がかかわった教員研修に参加した教員の合計数は約 8000 人にのぼり、プレサービス研修や生徒たちへの動機付けのプログラムへの参加者を合わせると 30000 人ほどにもなります。隊員活動の信条である「軍の魂」の活動としてはかなり大きな成果であり、特筆すべきことではないかと思えます。

以下、各サイトでの活動実績に対して調査者の所見を述べます。

#### BU-RSTC について

1994 年 9 月に隊員が派遣され、3 サイトの中では一番早く活動が始まりました。当時 BU-RSTC は新しい組織 (Aquinas 大学から移転されたばかり) であったため、まだ固有の活動がなかったため、初代の隊員がかなり苦勞して条件整備をし、翌年 1995 年より「Mobile School」(巡回指導) が開始されました。何も無い状態からのスタートで苦勞は多かったようですが隊員の努力がそのまま報われるかたちになったのはたいへんよかったですのではないのでしょうか。ほぼ同じ手法で(もちろん参加者のニーズに合わせて年々内容等に改善が加えられていますが)毎年、継続して巡回指導を行っているのは 3 サイトの中で BU だけです。実績の表からはわかりませんが、巡回指導はすべて隊員とカウンターパートの共同作業で行われています。前述の通り、BU ではスタッフがほとんど不変のため、巡回指導がすでにスタッフに授けられているところがすばらしいと思えます。近年では教員だけでなく、生徒にも目を向けた「サイエンス・マジック・クイズ」を取り入れるなど活動の充実をはかっています。また、BU-RSTC 配属の隊員は教材製作やレッスンプラン作りにも力を入れていました。UP-ISMED での全国研修で紹介されたものを始め、隊員が作成した教材などを研修で使用し普及に努めました。いくつかの教材は「低価格教材」として希望者へ販売し、その売上を活動に利用する IGP (インカム・ジェネレーション・プログラム) も行っています。

RTP、NTP にも積極的に関わっている印象です。特に 1998 年に行われた生物の RTP、DTP に関しては生物担当であった隊員がモニター調査を行い、ISMED で紹介された教材が地方研修にどれくらい適用可能かを報告書にまとめているので参考にしたいと思えます。それ以前もリーダー・トレーナーのサポートというかたちで参加していましたが、それはパッケージ協力への貢献というよりカウンターパートがリーダー・トレーナーであったから、という理由のほうが大きかったのではないかと感じています。

#### WVSLU-RSTC について

BU-RSTC に 9 ヶ月遅れて隊員が配属になり活動が始まりました。BU とは対照的に隊員が配属された時点で創立 25 周年の古参 RSTC でした。ここには従来から「Outreach Program」という巡回指導の形態があり、スタッフ(当時すべて大学の教員との兼任)の時間が取れるとき(年に 1~2 年)に地方の高校へ出かけていき、研修を実施していました。隊員はこの活動のサポートをすることになっていましたが、これが定期的ではないので活動計画がなかなか立てられませんでした。そこで隊員は、「もっと地方の教員に対して効果的に管理できる活動はないか」と考え、ニュースレターの発行を始めました。こ

これは当初、アトランダムに選出した地方の公立高校に対して、「物理・化学・生物・地学・数学+日本語」のトピックを盛り込んだニュースレターを配布することで始まり、1998年になって1号から12号までをまとめた輪刷版を作成し販売しています。この輪刷版は各教科を網羅したミニ・実験書のようになっていて現場の教員に好評のようです。

そのほか WVSU-RSTC での隊員の活動で注目したいのが JICA 機材供与校への働きかけです。JICA は何回かにわけて地方の小・中学校に台風耐性校舎と理科実験機材を供与しています。校舎はともかく、機材は使われずに放置されている場合が多く、それらの機材を有効利用するために機材供与校を訪問し使用法の紹介セミナーを開いています。後述しますが ADDU でも隊員が JICA 機材供与校を巡回しています。しかし WVSU では近隣の学校の教員も招いてセミナーを行っており、最終的に Region 6 内のほとんどすべての JICA 機材供与中学校から教員が参加したことを特筆しておきたいと思えます。この活動のよいところは、機材がすでにあるのでセミナーを行う際の問題が少ないこと、ホスト側(供与校)がたいへん好意的に隊員の訪問を迎え入れてくれることです。つまり、「JICA 供与校に JICA のボランティアがきて使用法を教えてくれる」という流れに無理がないところがよいのだと思います。上記の活動にもっとカウンターパートを巻き込んで行えるようになればさらによいと思えます。

RTP、DTP については 1998 年より本格的に取り組んでいるようです。それまでは RTP における隊員の役割が明確ではなかったこと、その時期に RSTC 主催の研修が重なって開催されていたことが原因でそれほど関ることがなかったようです。

ADDU-RSTC について

1995 年 9 月、BU に一年遅れて隊員が配属され活動が始まりました。他のサイトと異なり、私立大学にある RSTO であり、組織の規模としてはかなり小さいものでしたが、RSTC のスタッフとして働いているアメリカ人神父やイギリス人ボランティアとともに JICA 機材供与校の巡回などから活動をはじめています。98 年の 8 月に 4 教科の隊員がそろったので 9 月から巡回指導を開始しました。巡回指導時に理科の現象の原理を現地語を使った劇で見せる「サイエンス・サーカス・ショー」を行ったり、巡回指導をフォローアップするためのニュースレターを発行するなど、独自の活動を展開しました。しかし ADDU-RSTC の場合、すべての活動は隊員だけで行っており、隊員の負担の大きいところが問題でした。

ADDU-RSTC での隊員の活動で注目したいのは「地方研修トレーナーへの伝達技術指導(デリバリースキルトレーニング)」です。これは 1998 年の地方研修が行われるのに先駆けて ADDU で行われましたが個人的にはその研修の主旨(若い、経験も浅い日本人が伝達技術を指導する、という部分で調査者は少なからず不安を感じました)よりもそのインパクトに感銘を受けました。今回調査のためにダバオを訪れたとき、あちこちで現地の教員によってデリバリースキルトレーンが行われており驚きました。このような形でフィリピンの現職教員の自主性を見たのははじめてでした。今後隊員がこの研修を行うかどうかはわかりませんが、どのような展開を見せるのか楽しみなプログラムのひとつです。

また ADDU-RSTC 配属の隊員は他の 2ヶ所に先駆けて公立高校の教員とのチーム・ティーチングや技術指導を始めています。今後、隊員に求められる支援として「現場の教員に直接指導する」ことも求められる可能性が高いのでさらに学校配属の効果や妥当性について調査が必要だと思います。

4. 「III. 各関係者へのアンケートおよびインタビュー調査結果」

1) DOST-SEI に対する調査事項と調査結果について

シニア隊員の配属先である DOST-SEI に対しての調査です。配属先の長である SEI 所長を始め、シニア隊員の所属する部署のチーフと副チーフ、カウンターパート、RSTC を担当している職員に対してアンケートを取りました。主にシニア隊員の活動環境、ミニッツにサインした機関としての責務を果たしたか等を調査しました。この時の調査者は本書報告者のみです。報告者もここに配属されており、実際の経験からこの配属先についての意見を述べたいと思えます。

SEI 所長をはじめスタッフは、本プロジェクトに対して大変好意的に支援してくれています。アンケートの結果から明確に

読み取ることは難しいかもしれませんが、「一番よい評価をつけてない」ことは調査者からみて、「慣習性の高いこと」だと考えます。また改善の余地があることを独らは認めています。概して「よくできていた」という評価です。余談ですが、フィリピン人に段階評価のアンケートを取ると、一般的には「ほとんど一番よい評価」をしてくれます。特に今回のようなプロジェクトの評価ということになると、「評価が悪いと支援がなくなってしまうのではないかと考えるためです。こんなことを書いてしまうと、今回の調査にどれほどの慣習性があるのか疑問に思われるかもしれません。しかし、「してもらったことに対して決して悪いことをいわない」という国民性があるので結局のところはこの方法でよかったのではないかと思います。

DOST-SEI 側の関係やシニア職員への調査結果からもわかるように、DOST-SEI からは適切な支援が得られており、プロジェクト運営には大きな問題もありません。チーム派遣に関しては「パッケージ協力のスキームの中で一番よく機能しているのは DOST と協力隊のプロジェクトではないか」という声も SEI 関係者から出ています。一貫いい添えとするならば、協力隊のプロジェクト運営の仕事は多々ある DOST-SEI の業務の中でほんの数パーセントを占めているかいないか程度であり、日々多くの仕事に追われているスタッフにとっては、本プロジェクトがらみの仕事がかなり負担になっています。そういった状況をかながみても DOST-SEI はこのプロジェクトをたいへんよくサポートしてくれています。

## 2) 各 RSTC に対する調査事項と調査結果について

隊員の配属先である各 RSTC のスタッフに対しての調査です。配属先の最高責任者である大学の学長をはじめ、RSTC 所長、カウンターパートほかスタッフに対してアンケートを取り、時間が許した場合はインタビューもしました。メインの調査対象のひとつであるため質問事項は多岐にわたっていますが、主に隊員の活動環境について、また隊員の受入先としての責務を果たしたか、隊員の配属に関する問題点はあるか等を調査しました。この調査は本報告者が DOST-SEI の RSTC 担当者である Ms. Felicitas と共同で実施しました。

各 RSTC に関しては必ずしも最良の配属先とは言えない面もあります。しかし BU-RSTC はそのような中でも比較的うまくことが運んでいるように見えます。今回の調査結果でも、BU-RSTC での活動に関してはそれほど大きな問題がないようにでした。他の 2 サイトでは、根本的な RSTC の体制の問題やカウンターパートに関する問題がなかなか解決されないようでした。調査結果には直接現れてきませんが、調査を通じて大学内部や RSTC 内での人間関係の事情があることもわかりました。RSTC の諸問題の解決方法など頭ではわかっていることも「世間のしがらみ」で改善できないところもあるようです。以下、各 RSTC での調査結果に対して調査者の所見を述べます。

### BU-RSTC

回答からもわかるように業務環境はほぼ問題はありません。カウンターパートの問題もありません。これは BU-RSTC が大学から独立しており、RSTC スタッフは大学の授業をもってはいるものの、肩書きは RSTC のパーマネントスタッフであり、大学での授業数も軽減されて RSTC で活動する時間が補償されているからです。所長をはじめほとんどのスタッフが隊員の「業務活性化への貢献」を認めているので活動もしやすいと思われます。これまでの活動実績がそれを裏付けているのではないのでしょうか。

隊員の評価として、「教育技術」の点で 8 名中 7 名が長所として認めています。1 名「不十分」と答えています。この回答者は RSTC 所長なのですが、これは「隊員は実験技術や教材制作能力はあるが、教員研修を担うだけの教育的な経験を持っていない」と言っているのです。実際に隊員の方からも「隊員は教員研修には向かない」という声が上がっており、今後、支援体制を考える際に考慮に入れなければならないことであると思えます。また、短所として 8 名中 7 名が「言葉の問題」を挙げています。これは大抵の隊員が赴任直後には抱えている問題ですが、研修参加者等に意見を求めると「隊員にはカウンターパートがいるから問題ない」という答えも多く返ってきます。BU はほとんどすべての活動をカウンターパートと一緒にやっているため、これは大変な強みであると思えます(もちろん隊員自身もおのおの努力し時間がたつにつれて上達しています)。

1998年10月にDOST-SEIの援助(約800万ペソ)でRSTCの新しい建物が完成しました。実際に見学させていただきましたが各教科に1. 師歴ずつの講義・実験室および実験準備室が設けられており、後にはドミトリーも併設される(現在建築中)ことになっています。これまでの教員研修で問題になっていた、「十分な実験スペース、機材、宿泊施設」とほぼすべてを解決できるミニ-ISMEDのような理想的な建物であり、今後のRSTC研修を力強く支援してくれるであろうと思います。

パッケージ協力に関する質問では、どのスタッフもスキームの選択などについての知識が少ないようです。INSETシステムについては8人中5人が「知っている」と答えていますが、「INSET=すべての現職教員研修」と考えており、パッケージ協力が対象とするDECS主導の新しいINSETシステムをイメージするスタッフはほとんどいませんでした。パッケージ協力の評価としては「隊員の派遣に関してはたいへんよいものであったし、今後も続けてほしい」ということでした。他のスキームについてよく知られていないので、唯一よくわかっている協力隊活動についての評価になってしまうようです。RSTCの所長がRegional Steering Committeeのメンバーであっても、RTPにおける隊員の役割が不明瞭であった経緯などから隊員をパッケージ協力と関連付けることはなかったのではないかと推察します。実際に所長はRTP、DTPにおけるRSTCの役割は「支援をすることだけで、たとえば隊員がそれらの研修を支援することについてはDECSの方が依頼の手紙を書くべきである」と言っています。パッケージ協力においてDECSとRSTCの関係(もしくはDECSとDOSTの関係)がどうあるべきなのかを(単に「よく連携する」というだけではなく)もっと明確にしたほうがよいのではないかと感じました。BUではカウンターパートのほとんどが全国研修の参加者であるため、SMEMDPについてはいろいろな提案事項が挙がっていました。

#### WVSU-RSTC

業務環境は整ってきてはいますが、問題点も残されています。一番の問題はカウンターパートについてです。スタッフは、「適切なカウンターパートの任命」や「カウンターパートとの作業時間確保」の項目に半数以上が「よくできた」か「できた」と答えています。過去のスタッフ(カウンターパート)はともかく、現在は所長と秘書以外はオン・コールスタッフ(必要の生じたときに呼び出して活動する)であり、作業時間の確保はたいへん難しい状況です。またほとんどのカウンターパートは大学の付属高校の教員を兼任しており、巡回指導時(金、土曜に多く行われる)などに本来の仕事とRSTCの業務のが重なるため、問題が生じます。以前は大学の教員が兼任していましたので状況としては似ています。高校教員のカウンターパートの場合、研修の受講者も同じ高校教員であるため問題を共有しやすいという点で適切ですが、高校の授業数や授業形態を考えると、RSTC業務のための時間がとれないという点で適切とはいえません(高校の校長が彼らの上司になりますがRSTCは大学長の承認で業務を進めるために矛盾がおこる)。一方、大学職員の場合、RSTCは大学直轄であり、学長の承認があれば公的にRSTCでの仕事が認められます。その点では適切かもしれませんが立場の違い上、高校教員が直面する問題が理解されにくい点で不適切かもしれません。また隊員の立場からも(年配の)大学教員がカウンターパートになった場合は共同作業がしにくい等の意見が挙げられています。

ほとんどのスタッフが隊員の「業務活性化への貢献」を認めているので配属先での活動はしやすいと思われます。隊員にはほぼすべてのスタッフが好意的な評価をしてくれましたが、多くのスタッフが「言葉の問題」に言及していました。どのサイトにおいても「個人差がある」、という前置きがありますが隊員の抱える普遍的な問題のひとつです。

また、大学内部の事情で本来はここに記述すべきでないのかもしれませんが、多くのRSTCのスタッフがRSTC所長の運営に対して不満を訴えています。隊員活動に影響がなければ特に取り上げる必要もないのですが、所長自身、スタッフと共同でRSTCの事業を行っていくという意識がうすく、ワンマン計画の実施やスタッフおよび隊員への命令にほとんどのスタッフが不信感をもっています。よい人材がいながら、RSTCとしての継続的・効果的な活動が実施できないのは所長の方針によるところが大きいと思います。97年にRSTCのスタッフが交替になったのも、所長の方針に反対してスタッフのほぼ全員がRSTCでの仕事を辞退したためです。RSTCのような、ある程度スタッフのボランティアワークに支えられている機関の長として彼女は適格ではないような気がします。

パッケージ協力に関する質問では、「INSETシステム、パッケージ協力を知っている」と半数以上の人が答えていました。

が、BU と同様、どのスタッフもスキームの連携などについての知識は少なく、INSET システムが具体的にどのようなものを指しているのかわかるスタッフはほとんどいませんでした。パッケージ協力の評価としては「隊員の派遣に関してはたいへんよいものであったし、今後も続けてほしい」ということでした。他の背景もほとんど BU の場合と同じですが、WVSU ではカウンターパートのなかで全国研修に参加したことがあるのは 2 名(そのうち 1 名は数学で受講)だけであり、スタッフの中でも SMEMDP がどういったプログラムなのかを知る人が少ないように思います。これは SMEMDP が高校教員対象の研修であるために当初 RSTC からの参加者の枠(全国研修の受講者は 1 教科・各地域 4 名であり、そのうち 1 人は RSTC より参加することになっている)には大学教員であるコア・スタッフではなく WVSU の付属高校の教員を割り当てていたためです。RSTC のスタッフは全国研修開催時に重なって行われる RSTC 主催の夏期研修(6 週間)のトレーナー等を助めるため参加不可能であったことも一因です。また、今夏の RTP 開催の際に DECS 地方事務所と RSTC 間の連携に問題があったようでした。Region6 では RTP のために一度も RSC の会議などが開かれなかったようで、何の知らせもなく開催地が WVSU から DECS の高校に変わったり(高校生物・高校地学のみ)、RSTC の所長に RTP のスケジュールが連絡されたのは研修のほんの 1 週間前ほどであったりしたそうです。WVSU の場合 RSTC 所長は「RTP での RSTC の役割は開催地を提供することだけである」と断言しており、その開催地さえ変わってしまった今年は RSTC と DECS 地方事務所との連携(隊員の研修支援以外は)まったくなかったのではないかと思います。この所長の認識は、上述したように RSTC スタッフが全国研修に参加していないことにも起因していると思います。しかし、地方ではまだ関係機関の連携が確立されていないということが一番の原因だと思います。今後このような形で協力を続けるとするならば、プログラムにおける関係機関の役割を周知させるとともに、それを調整する人もしくは機能をしっかり確保させる必要があります。その条件整備ができないままではプロジェクトの実施は効率性が非常に悪いと思います。

#### ADDU-RSTC

業務環境は 1998 年の 12 月に行われる事務所移転に伴って大幅に改善されるとのことではありますが、プロジェクトの期間のほとんどはかなり環境的に問題があったと思います。現在の事務所は大学キャンパス内の小さなプレハブ一室のみで、実験室もなく、スタッフも所長と秘書以外は外国人ボランティアしかいない状況が長く続いています。またカウンターパートについても以前は大学の職員が任命されていましたが、本来の職務が忙しいため、また ADDU は私立大学であるため DECS の教員研修のために時間を割くのは困難な状況でした。現在は付属高校の教員がカウンターパートとされていますが、現時点ではまだ、作業時間の確保は実現されていません。しかしながら、そのような状況で職員は「現場の教員のためになにができるか」を考えて活動していたようです。ADDU-RSTC 所長は、隊員の意思を尊重していたので RSTC における活動はやりやすかったであろうと思います。ただ DOST がサポートをしている夏期教員研修以外は特に決まった活動もなく、サポートスタッフもいないため、何でもできるけれど逆に自分たちで土台から作っていくことが必要でした。そういった意味で職員はまさに孤軍奮闘だったかもしれません。「RSTC の業務をサポートする」というより「彼らの活動が RSTC の活動」のように思う人も多いのではないかと思います。

職員に対しては好意的であり、評価としては高いものでした。「言葉の問題」についての言及もありましたが、「職員が徐々に努力をしていた」とのことで、「実際に隊員の言語能力はとてもしよ上がった」そうで大きな問題ではないようです。また言葉の問題も踏まえうえて、職員は集団の研修ではなく、小人数もしくはマンツーマンの指導に携わるのが効果的であるというのが ADDU-RSTC 所長の意見です。職員が配属になってから研修参加者が質問をしに、または助けを求めに職員を訪れることが増えたそうですが、そういった支援が望まれているのではないのでしょうか。そういったきめこまかい支援が現場の職員には必要であると調査者も感じました(数は少なくともインパクトは大きい)。

ADDU には協力隊員のほかに 2 人の外国人ボランティアが活動しています。1 人は大学付きの神父でもう 1 人はむかしの VSO (Volunteer Service Organization) のメンバーだった方です。この元 VSO の方は RSTC で教材や薬品の小売を続け負っています。彼はあくまでボランティアとして活動しているうえに最低限のコストで教材や薬品を販売しているため、現場

の教員からのニーズはたいへん高いようです。彼のような存在は、教員が授業で実験を取り入れる傾向を高めていると思  
います(多くの教員が「物が無いのでできない」、「お金が無いので買えない」と言いますが彼の取り扱うものは安く、教員は  
喜んで買っていきます)。フィリピン人がこういった役割を果たすことができるのが理想ですが、現在のところ教員への教材  
や薬品販売が容易にできるシステムが比国には無いと思われま。今後、こういったシステムをそれに携わる人材の育成  
を進めるような協力があるといのではないかと思います。また、彼からは「教材の病院」を作ることで、地方の学校の機  
に眠っている教材の有効利用ができるのではないかと。という提案もいただきました。

パッケージ協力関連では、実質上評価できるほどプログラムに関した人は所長だけでした。彼女の意見も他のサイトと  
同じく「隊員の派遣に関してはたいへんよいものであったし、今後も続けてほしい」ということでした。この地域は比較的  
DECS との連携は取れていたようですが、これは RSTC 所長が DECS 出身の方であるために個人的なつながりがあったた  
めではないかと思われま。DECS が隊員の役割について認識していなかったため、隊員にとっては活動しづらかったとい  
うコメントがありました。

3) シニア隊員に対する調査事項と調査結果について

1997年2月に赴任され、現在活動している中井シニア隊員に対しての調査です。シニア隊員の業務について、またシ  
ニア隊員から見たプロジェクトの状況等について調査しました。調査者は本報告者のみです。それぞれの質問に対してたい  
へん詳しく答えていただいているので当初からのプロジェクトの経過や現状がよくわかると思います。また個人的に中井シ  
ニア隊員の隊員に対するサポートや業務処理能力はとて高く評価しています。これもまったく個人的な意見ですが、今後  
プロジェクトが延長されるのであれば是非同シニア隊員にも延長していただきたいと思いま。

質問への回答以外にシニア隊員から協力隊のカウンターパート研修の枠が隊員12人に対して年間1人というのは少な  
いのではないかと。という意見をいただきました。

4) 隊員に対する調査事項と調査結果について

現在活動している隊員10名に対しての調査です。今回の調査では彼らが一番の当事者であるので、アンケートを取り、  
1人1人にインタビューもしました。各サイト3~4人で今年7月赴任(配属先には8月赴任)の隊員が全体で10名中5名  
いるため3サイトをまとめて集計しました。量的にはおぼつかないところがありますが、長くいる隊員がしっかりと回答してく  
れている面もあるので評価の材料になりうるとは思っています。サイトがわかったほうがよいと思われるコメントにはサイト  
名をつけました。業務のことから個人的な意見まで幅広く調査しているため、隊員も答え愛れているところがあるかもしれま  
せん。この調査は本報告者が DOST-SEI の RSTC 担当者である Ms.Felicite と共同で実施しました。

今回の調査で隊員は限られた条件の中で非常によくがんばっていると感じました。カウンターパートの問題を抱える隊  
員が多かったため、それは今後の課題になりそうです。活動環境等はサイトによってまったく異なるため、各 RSTC に対す  
る調査とあわせて見ていただきたいと思います。彼ら自身はパッケージ協力の一部として評価される、という意識は少ない  
ように感じますが、パッケージ協力の今後の行方によって隊員の活動の質も変わりそうな気配なのでそのあたりは気にして  
いるようでした。

以下、各サイトでの隊員への調査結果について調査者の所見を述べます。

BU-RSTC

教員経験者(非常勤講師)1名を含む平均年齢26歳の3名(12月にさらに1名赴任予定)です。業務環境についてはほ  
ぼ満足しているようです。新しい建物も完成して水の供給も改善されたことを喜んでいました。カウンターパートについては、  
他のサイトに比べて問題は少ないとはいえるものの、隊員自身の活動から考えると、「問題がないわけではない」というのが  
率直な意見です。たとえば日本に研修に行ったカウンターパートを持つ隊員は「能力が高く経験も豊富のため」もう隊員は



必要ないのでは」と言っていました。また、カウンターパートが修士課程取得のためにマニラで勉強することになり、彼女のかわりにカウンターパートとして任命されたスタッフは違う教科の専門であるために効果的な支援ができないという意見もありました。ここは協力期間が一番長く、陣員の交代も何度か行われていますが、スタッフが以前の陣員と現在の陣員を比較したり、チーム内のほかの陣員と比較するようで、活動しにくいという意見がありました。

陣員に自身の活動の評価をしてもらうとかなり辛い点をつけるようですが、調査者はもっとよい点をあげてもよいと思うほどがんばっていました。

チーム派遣の評価では、「RSTC の活性化には寄与しているというものの、目標や目的が抽象的でどのような活動がふさわしいのかがわかりにくい」という意見が出ていました。SMEMDP については NTP の参加者のレベルについて疑問が出ていました。彼らは1度の全国研修を受けた後に地方研修のトレーナーになります。地方によっては若い、経験の少ない職員が DECS より推薦されてくる場合があり、研修の指導が難しいことがあるそうです。また JIGA 専門家の方々ともっとコミュニケーションを取りたいという意見がありました。パッケージ協力については特に意見はありませんでした。

#### WVSU-RSTC

教員経験者(非常勤講師)1人を含む平均年齢26歳の4人です。陣員の立場からは「カウンターパートとの作業時間確保」が当面の問題であると思われる。また、学校からのリクエストを受けて行われる活動が多いため活動計画を立てるのが難しいという問題があります。年間計画は立てていますが、計画どおりにプログラムが実施されることはまれだそうです。また実験室等の設備ですが、DOST-SEI の援助で WVSU にも2部屋の実験室兼機材保管室が作られています。これは1986年に完成したのでこれまで陣員が研修準備等にも利用してきました。陣員の活動用の机もその部屋にあるためそこで活動する時間が長いのですが RSTC の事務所が離れているため陣員と所長間のコミュニケーションに問題が生じているようです。所長の方針と陣員の考え方があわないことがあり陣員が効果的に活動に活かされていない、という意見もありました。

チーム派遣の評価としては「陣員間で助け合え、協力しておきなプロジェクトを成功させることもできるのでよい」といった意見がでていましたが一方で「陣員4人が1ヶ所にいることにそれほどメリットはない」という意見もありました。SMEMDP については「所長の認識と DECS との関係」を改善することが第一の課題であるようです。パッケージ協力については、「どういったプロジェクトなのか等がカウンターパートに周知されていないところがあるため、もっと啓蒙が必要ではないか」ということです(スタッフの改組があったため)。

#### ADDU-RSTC

教員経験者(現職)2人を含む平均年齢29歳の3人(12月に1人赴任(教員現職参加)予定)です。WVSUと同じく「カウンターパートとの作業時間確保」が当面の問題であると思われる。しかし、ADDU の陣員は RSTC でのカウンターパートだけではなく、全国研修を受けた公立高校の現職教員を RSTC 外のカウンターパートにしようと働きかけています。実際に以前の陣員は公立高校の教員とチーム・ティーチングを行い、その教員からは「もっとそういった機会がほしい。」という意見が出されていました。ほかに、RSTC から陣員への活動の要請がないため(所長の方針)、陣員自ら活動を起こさなければならず、自発努力が促せない状態です。体制的な問題であるのはわかりますが、改善する必要があると思われます。

チーム派遣については、「陣員の募集、選考の段階で候補者に業務等の詳しい説明をするべきである」という意見が上っています。チーム派遣の概要を知らないまま赴任する陣員のなかには「チームとしての活動」に疑問を持つ人もいるからであり、その場合他の陣員と協力し合って効果的な活動は期待できないからだそうです。また、現在のような派遣状況や仕事の現状からは複数の陣員が同一の職場にいるメリットはあまり無いのではないかと意見もありました。SMEMDP については当初より役割がはっきりしてきたので、リーダー・トレーナーを RSTC 外のカウンターパートとして技術移転をしているということです。パッケージ協力については特に意見はありませんでした。

現在はそれほどでもありませんが、ある時期「パッケージ協力における協力隊の位置付け」について、3サイトの隊員間でよく話し合われていました。「隊員が各サイトで行っている活動は果たしてパッケージ協力の目標や目的に沿っているものなのか？」という問題について隊員が話し合わなければならなかった事象については本協力の関係者の方々にも知っていただきたいと思います。プロジェクト開始当初は達成目標もなにも与えられていなかったため、隊員は手探りで活動をはじめました。サイトごとに状況も異なるため、「どのような活動が(その地域で)有効か」を試行錯誤しながら、ようやくそれぞれの活動体制を整えたところに、「パッケージ協力への貢献」を求められた隊員はかなり困惑したのではないかと思います。パッケージ協力は JICA でも初の大規模な援助の試みであるということで周囲の期待が大きくなることは必至です。それほどプロジェクトであり、開始前に調査も進めているはずなのになぜこのようなことがおこったのかを明確にして今後のプロジェクト計画にフィードバックしてほしいと思います。

その他、隊員派遣に関係することで、記しておきたいのは以下の点です。

- 隊員が継続して派遣されないと活動計画がうまく実施できない。  
BU ではかなりスムーズに隊員のリクルートがされており困難はないですが、WVSU と ADDU では長い期間隊員のない教科があり、活動にも支障をきたしていると思います(シニア隊員に対する調査結果(10)参照)。
- 隊員の派遣時期を考慮することで活動がより効果的になることが期待できる。  
パッケージ協力では「プロ技の全国研修で扱われた内容を地方で展開すること」が協力隊の役割として期待されていましたが、全国研修が行われる教科はその年ごとに決まっております(たとえば1998年は物理・化学・高校数学)。また時期もこの国の夏期長期休業中(4、5月)となっていました。物理の隊員が1998年の7月や12月に派遣になった場合、全国研修には参加できずに地方研修に望むことになり、期待されている活動を行うには不利な条件で挑まなければならなくなります。したがって活動一年目に担当科目への全国研修が見学でき、二年目に地方研修を支援できる派遣ができればベストだと思います。

5) 各種研修トレーナーに対する調査事項と調査結果について

地方研修でトレーナーとして研修を担当した教員に対しての調査です。RSTC のスタッフや隊員に調査対象となるリストをつくってもらい、それに基づいて彼らを訪ねました。アンケートを取り、時間が許せばインタビューもしました。研修の運営はどうであったか、研修で用いられた教材の有効性等、また隊員が研修にどのようにかかわっていたかを主に調査しました。この調査は本書報告者が DOST SEI の RSTC 担当者である Ms. Felicitas と共同で実施しました。

運営状況は地方によって異なっていました。「よくできた」と答えたのは Region 5 と 11 のトレーナーでした。Region 5 では DECS の担当者がしっかり運営を行っていたため、Region 11 では ADDU-RSTC 所長が運営に携わり、うまくイニシアティブを取っていたためだと思います。Region 6 では DECS 地方事務所の運営に対して、メモランダムや材料の買達の遅れ等を指摘していました。

教材の有効性については興味・関心を引いた点や理解を促進したと言う点でかなり認められると過いますが、これだけでは「普及した」と言えないと思います。実際に研修で作った物は大事に持ちかえり、授業に利用しているようですが、それ以外に新しい教材を作ってみるとか改良(ここでは地方適用化)すると言ったトレーナーはほとんどいなかったからです。

予備実験等の準備では調査対象者の半分以上が隊員と一緒に準備をすすめており、多くのトレーナーが隊員の職務的な支援に感謝していました。Region 11 のあるトレーナーは DECS 地方事務所に研修の準備を隊員やほかのトレーナーと RSTC で行えるように便宜を図ってもらうよう提案し認められてもらったそうですが、その責任者が異動で他の地域に移ってしまい、その後どうなったのかはわかりません。研修中の隊員のサポートも高く評価されています。しかし初等教育や数学の分野には隊員がいないため、それらの教科担当のトレーナーはその分野での隊員の派遣があればよかったと言っていました。

パッケージ協力や INSET システムを知っている人が 3 分の 2 を超えています。調査者が「協力隊もパッケージのコンポーネントのひとつだ」というと、「協力隊派遣を知っている」ということでかなりのトレーナーは「YES」と答えています。INSET システムについても「SMEMDP のような...」という「それなら知っている」となりますので、この結果をもとに「パッケージ協力」や「INSET システム」が地方のトレーナーにも理解されているとは考えにくいと思います。

#### 6) 各種研修受講者に対する調査事項と調査結果について

各種研修を受講した教員に対しての調査です。ほとんどは RTP の参加者です。RSTC のスタッフや隊員に調査対象者のリストをつくってもらい、それに基づいて彼らを訪ねて行ってアンケートを取り、時間が許せばインタビューもしました。研修の運営、研修で用いられた教材の有効性、また隊員が研修にどのようにかかわっていたか等を主に調査しました。この調査は本報告者が DOST-SEI の RSTC 担当者である Ms. Felicitas と共同で実施しました。

運営状況は地方によって異なりましたが Region 11 では半数以上、Region 5 でも約半数の受講者が「よくできた」と答えました。これは DECS の担当者もしっかり運営を行っていたためだと推測されます。Region 6 では DECS 地方事務所の運営に対して、メモランダムな遅れや高い研修費のことを指摘していました。

教材について興味・関心を引いた点や理解を促進したと言う点はまずまずの有効性が認められると思いますが、研修トレーナーに質問したときとは異なり、あまりコメントがなかったので断言はできません。

隊員は何らかの形で研修に携っておりよい評価をもらっていますが、これもコメントが少ないため、数字のみでの判断は難しいと思います。

パッケージ協力や INSET システムを知っている人は、それぞれ全体の約半数と約 3 分の 1 でした。これは研修受講者にはインタビューを行う十分な時間が無かったため、「パッケージ協力」や「INSET システム」という言葉自体を知らなければ、必然的に「NO」、もしくは無回答になるからです。調査者が「協力隊もパッケージのコンポーネントのひとつだ」とか INSET システムについて「SMEMDP のような...」と言わなければ、「YES」と答えた人のほとんども「パッケージ協力」「INSET システム」という言葉を聞いても何であるかをイメージできないという実態です。

#### 7) 各モデル地域での関係者に対する調査結果(インタビューのみ)について

各モデル地域での、主に DECS の職員に対しての調査です。RSTC のスタッフや隊員に調査対象者となるリストをつくってもらい、それに基づいて彼らを訪ねていき、口頭でインタビューをしました。INSET 研修はどのように行われているか、研修を行うにあたって何か問題があるか、隊員が INSET システムの研修にどのようにかかわっていたか等を質問しました。この調査は本報告者が DOST-SEI の RSTC 担当者である Ms. Felicitas と共同で実施しました。

それぞれの地域で苦労しながら RTP、DIP を開催しているようです。問題を聞くと、必ずといっていいほど「予算的なもの」と答えるのですが、多かった意見は「なぜ中央(DECS)や JICA は RTP のサポートしないのか?」ということでした。地方こそサポートが無いと研修そのものを開催できないような状況である、というのが彼らの言い分でした。調査者としては、地方展開することはあらかじめ決まっているのだから DECS が中央と地方でもっと連携を深めて、RTP 用の予算や DIP の予算を国が確保し、研修開催時に分配する等の措置が取られていてもよかったのではないかと思います。まったく同じことを ADDU RSTC 所長も言及していました。またパッケージとして省庁間の連携があるなら、DOST も RTP 用の援助ということでその時期に必ず RTP をサポートする目的で使用されるような予算をおろす、といったことがあってもよかったのではないかと思います。

ほとんどの方が隊員の有用性を認めてくれていましたが、なかには隊員の役割が何であるかということを知らない方もいました。隊員とのかかわりが深い方は、さらにサービスの延長(より地方まで、より学校レベルまで)を望んでいました。また隊員の学校配属に関しては好意的な反応を示す人が多かったように思います。

8) PNVSCA(Philippine National Volunteer Service Coordination Agency)に対する調査事項と調査結果について

フィリピン国でボランティアの受け入れ窓口となっている機関の職員に対する調査です。PNVSCA 用に作ったアンケートに答えてもらいました。PNVSCA はパッケージ協力のミニッツにもサインをしているので、主に他の協力機関との連携について質問しました。調査者は本報告者のみです。実際にこの機関が職員と関るのは赴任時オリエンテーションと活動期間中のレポート、モニタリング程度であり、活動についてよりも業務調整的なことが主でした。しかし彼らはミニッツにサインをしたにも関わらず、Joint Steering Committee への出席要請がなかったり、フィリピン側の評価団に入っていなかったり、という経緯があり、フィリピン側のカウンターパートの連携が足りないのではないかという意見でした。

9) DECS-CMT(Central Management Team)に対する調査事項と調査結果について

フィリピン側のパッケージ協力の主管である DECS の職員とチーフアドバイザーで構成されているグループのうち RTP をモニターしたメンバーに対する調査です。DECS-CMT 用のアンケートに答えてもらいました。主に協力隊の記録について調査しました。なお調査者は本報告者のみです。職員にはたいへんよい評価をいただいておりますが CMT のメンバーは地方研修でのモニタリングでしか職員と関る機会がないということも考慮に入れておいていただきたいと思っております。職員は地方での貢献度が高いということで今後も活動を期待しているとのことでしたが、「DECS の教員に対する活動を行うことになっているのであるから DECS との連携を強めるべきだ」という意見や「DECS に配属されるべきだ」という意見もありました。

10) UP ISMED に対する調査事項と調査結果について

プロジェクトタイプ技術協力のプロジェクトサイトでの調査です。職員がプロ技とどのような連携をとったかを中心に調査しました。調査者は本報告者のみです。協力隊とプロ技の連携を調査しました。概して職員にはたいへんよい評価をいただいておりますが UP-ISMED の職員は全国研修(数人は地方研修でのモニタリングの際にも)でしか職員と関る機会がないということも考慮に入れておいていただきたいと思っております。多くの ISMED スタッフは「職員の(全国研修における)役割がよくわからない」ということでした。「(職員の役割は)全国研修を見学し、地方研修でリーダートレーナーのサポートをすることで」という説明をしたところ、それならば「お確立された研修をただ参加するだけではなく、準備期間に ISMED に来てはどうか？そのほうがたくさんの方が学べる」、といった意見をいただきました。個人的には「職員の研修」という意味で面白い試みであると思っておりました。実際に準備期間に ISMED を訪問した職員がいましたが、その機会にスタッフや専門家と懇話になれるよ、技術を学ぶこともできてよかったそうです。そういったことが ISMED と協力隊の間で公的に取り決められるならば最終的に地方展開のよい助けになると思われます。地方展開における役割を重要視していただいているようで、今後も地方での協力隊の活動に期待しているということでした。